

42252

教科書文庫

4
810
42-1928
20000 71948

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

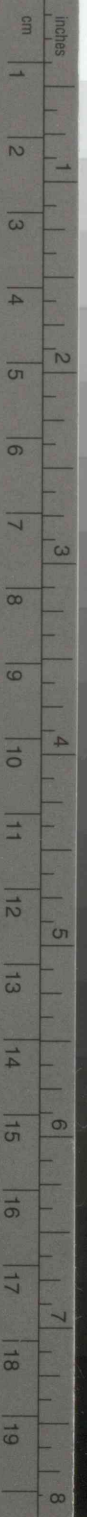


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

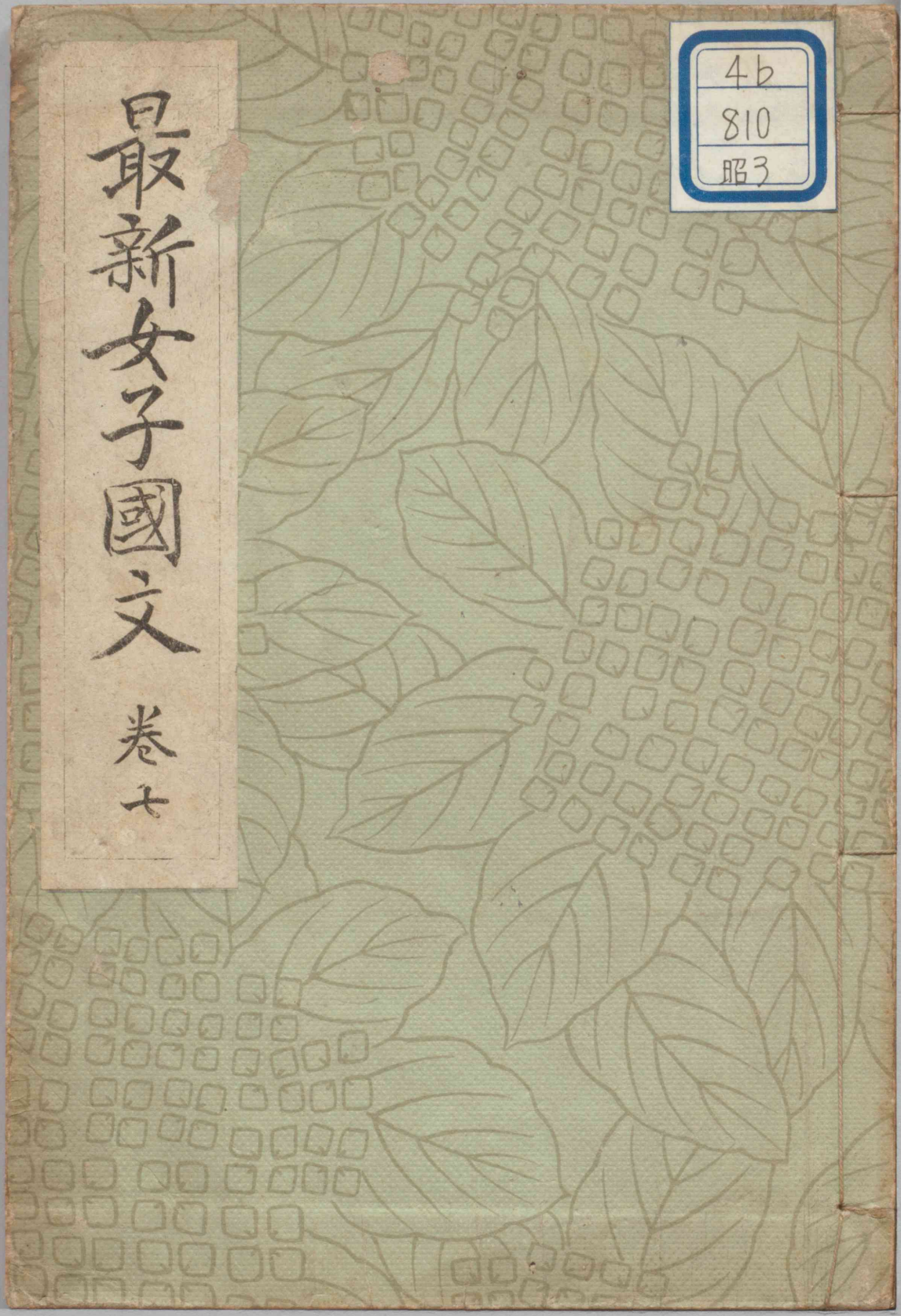
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
810
昭3

最新女子國文 卷七



本書は國語及び國文學の本質に顧み、其の編纂法に於て舊套以上に一段の進出を試み、更に各卷並に通卷の綜合的體系と意趣とを重視し、國語教授上最新の用書たるに堪へしめんことを期したるもの、編者はこれが適當なる運用に依りて本科の目的の完全に達成せられんことを切望す。



(筆匠岡松) 船の首飾頭龍

最新女子國文

卷七 目次

一	櫻と國民性	深作安文	一
二	感想二篇	相馬御風	九
一	愛語		九
二	獨樂のすわり		二
三	詩境	夏目漱石	三
四	風に吹かれる草(詩)	田尻稻子	三
五	落花の雪	「太平記」	四
六	聚落第の行幸	荒木田麗女	六
七	苦しき人々	長塚節	四
八	父及び子として	小林一茶	四

一	をさな兒	四
二	みとり日記	四
九	折節のうつりかはり	四
一〇	行く川の流	五
一一	六月の雲雀(詩)	五
一二	鹽原	六
一三	短歌選	六
一四	狂歌と川柳	七
一五	芳流閣上の格闘	七
一六	作者の心境	八
一七	奥の細道	九
一八	元祿俳句選	一〇
一九	矢島樺子刀自の印象	一四

二〇	死と永生	二〇
二一	岳の日没(詩)	二四
二二	古今と新古今	二六
二三	滋の井	二三
二四	洋畫の觀方	三〇
二五	文學と人生	三七

自修文

恩讐の彼方に	菊池 寛	一四
--------	-------	------	----

最新女子國文

卷七 目次終

一 櫻と國民性

二 文壇の新人

三 小説の發展

四 詩の發展

五 小説の發展

六 詩の發展

七 小説の發展

八 詩の發展

九 小説の發展

十 詩の發展

最新女子國文 卷七

一 櫻と國民性

深 作 安 文

深作安文
倫理學者、文
學博士。東京
帝國大學教
授。茨城縣の
人。

櫻花には梅花の清節はない。薔薇の濃艶はない。桃花の豊麗、牡丹の富貴はない。海棠の妖艶、菊の洒脱はない。けれども其の咲きも残らず散りも初めぬ爛漫たる樹頭に、鮮かな朝日の照添ふ所は、げに百花の王たるに恥ぢないのである。長堤十里、若しくは満山雲か霞か、人をして思はず快哉を叫ばしめる壯觀は、獨り櫻の擅場ではあるまいか。朧月夜の櫻花は、人をして恍惚として花神に接するの思

あらしめる。巨松の間に錯落する櫻花の、松はいよ／＼翠に、花はいよ／＼白いのは、又となき眺である。其の他、春雨に濕ふもの、夕陽に映ずるもの、高閣に配するもの、池水に臨むもの、名刹の花、古都の花、何れも見る者をして、我が國で花といふ名が全く櫻花の獨占する所となつた事の、更に異しむに足らぬ事を思はしめるのである。

二

若し之を櫻の自然美と言ふならば、之が歴史美も亦一入の趣味を有つて居る。「花は櫻木人は武士。」櫻花は花中の花であつて、武士は人中の人である。昔から櫻花と武士とは其の因縁甚だ深いものがある。勿來關外、馬上槊を横たへて、紛々たる落花に行く春を惜しんだのは八幡公である。一度鎮西に行かうとして淀より引返し、京師に師門を叩いて歌集を託し、其の内せめて一首を勅撰集に留めることが出来れば、たとひ死すともなほ生けるやうであると言つたのは

八幡公
八幡太郎源義家。

誰かよりのあかし、
なごかんりかしの、
にたる 杯はあり

平薩州
薩摩守平忠度。

さゝなみや
實の都はあれ
にしを昔なが
らの山櫻かな。

一詩
天莫空勾
踐時非無
范蠡。
備後三郎
兒島高德。

延元御陵
後醍醐天皇の
御陵。

平薩州である。俊成卿聞いて、感涙を流して之を諾し、後千載集を撰するや、それに採録したのが彼の「さゝなみや」の絶唱である。夜ひそかに行宮の櫻樹を削つて一詩を題し、人臣の至誠を雲上に奏して、叡慮を安んじ奉つたのは備後三郎である。若しそれ南朝と櫻花とに至つては、互に相俟つて人をして言ふべからざる感慨に、思はず袖を絞らしめるのである。

芳野は畏くも南朝五十餘年の行在所の在つた所、忠臣義士の悲憤の血涙は、果して幾度其の櫻花に向つて注がれたであらうか。恐多くも延元御陵の花は、今に至つて尙無限の恨を物語りつゝあるのである。

三

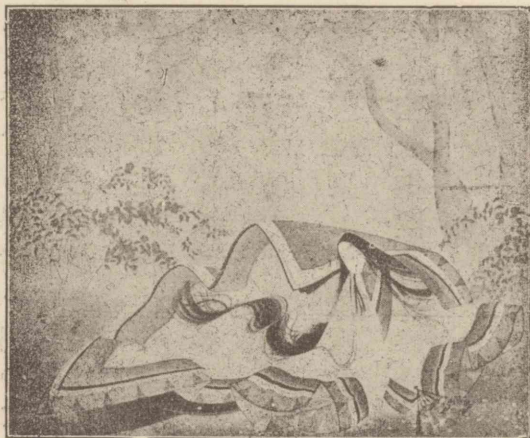
それ斯くの如くであれば、我が國民は花を賞するより更に賞すべきはなく、我が民族は花を愛するに、櫻花を愛するより更に愛すべき

ものはない。櫻花の季節は所謂春風駘蕩、寒からず暑からず、眞に春中の春である。そこで上下を問はず貧富を論ぜず、春服を纏ひ、芳醇

百敷の大宮人
はいさまあれ
や櫻がさして
けふも暮しつ。
(山部赤人)

夜嵐や
閑女の句。

木の下に
芭蕉の句。



つて、満堤の白雲長さ十里、樹下の雜鬧騷擾は、日暮れんとして益甚だしく、船中の酣醉舞は、心を空の情景が眼前に展開し來る心地がする。

櫻

を味はひ、嬉々として九十の春光に行樂を恣にするのである。彼の「百敷の大宮人」とは殿上人の櫻狩を詠じたものであつて、春の日の長閑さが目の前に見える心地がする。「夜嵐や太閤様の櫻狩」とは、醍醐に催して豪奢を極めた豊太閤の花見を詠んだものである。「木の下に汁も膾も櫻かな」とは、江戸趣味の花見を描いたものであ

年々歳々
似、歳々年々
人不、同、(劉
廷芝)

芝離宮
芝風。
濱離宮
京橋區。

花神の殊寵を蒙る我が國民の如きは、蓋し世界に其の類例を見ない所である。言ふまでもなく年々歳々花は相等しいけれども、之を見る者は年毎に其の壽を加へつゝあるのである。然るに一度この花に對すれば、忽ちに新しみを感じて、老の將に至らんとするを知らないのは、誠に不可思議の事ではあるまいか。そは蓋し其の刹那、美感に打たれ靈感に觸れて、花や人、人や花、花と人と渾然融解し去るが爲であらう。是に由つて之を觀れば、櫻花は我が民族の趣味精神の象徴である。東方君子國の精華である。古來櫻花が我が國民性を鎔冶する上に偉大な力があつた事は、之を想像するに難くないのである。觀光の爲、外人の我が國に來る者は、花の季節に最も多いのである。而して畏くも觀櫻の御宴に、芝濱の離宮に御招待にあづかることを以て、無上の光榮とするのである。思ふに此の時、彼等は初めて我が純日本の趣味を感得するであらう。吾々は是に於て歴史家で

花よりあくる
花よりあくる
みよし野の、
春の曙見わた
せば、唐土人
もこま人も、
大和心になり
ぬべし。

且愛國的詩人であつた頼山陽の「花よりあくる」の今様を想起せざるを得ない。今日では其の大和心となるのは、嘗に唐土人と高麗人とばかりではない。世界の人が悉く左様であらうと思はれる。

四

櫻花と我が國民性とを對照して見ると、驚く程の類似若しくは一致を見出すのである。櫻花は陽春三月に開いて、至つて陽氣である。世間的樂天的である。梅の隱逸は之をこの花に認めることは出来ない。況して蓮の厭世をやである。我が國民性もまた然りである。由來我が國民は快活であつて、少しも厭世的傾向がなく、極めて世間的樂天的である。これ其の一。櫻花の色は所謂櫻色であつて、淡紅であり淡泊である。堇の濃紺なく、ダーリヤの深紅がない。我が國民性も亦その通である。我が國民は昔から淡泊を愛し、正直を重んじて、物に執着なく、事に凝滞がない。儒教の入り、佛教の入り、西洋文

明の入つて、容易に我が文明に同化されたのも、一にこれが爲である。これ其の二。櫻花は密集して開くものであつて、極めて賑やかである。之を眺めるには、例へば芳野の一目千本といふやうに、集團的なものが可い。唯一本の櫻、活花の櫻、盆栽の櫻はさまで人目を惹かない。全山皆櫻、滿堤悉く櫻であつて、初めて眞の櫻花美を窺ひ知ることが出来る。大和民族も亦然りである。もと家族制を以て立つた所より、國家的觀念甚だ強く、國民的結合極めて堅い。其の外國と難を構ふるに當つて、益、其の一致團結を強くし來るのを見て之を知る事が出来る。これその三。

五

我が邦の櫻は花があるけれども實はない。否、全くない譯ではないが、殆ど言ふに足らぬのである。只其の花は壯美、秀麗、迥かに百花に抽んで居る。就いては之を理想的の花といつてよいと思ふ。

我が國民、殊に武士は頗る之櫻に似てゐる。其の純忠勇敢清廉質素等の諸美德は、これ一定の主義理想から導き出され、この主義を實行し、この理想を實現せんとして努力するものである。櫻花が大和魂の體現、武士道の表彰として、武士の理想を寓する所となつたのは全く之が爲である。これその四。最後に述べべきは武士の精神に似通つた點のあることである。櫻花は速かに開き速かに散つて、開落共に慌しいのである。一日見ることを怠るといふと、白雪滿地、而も新緑已に樹頭に上るのである。其の散際は極めてうつくしく、極めて淡泊であつて、微塵も未練がましい所がない。櫻花が武士の精神と融通する所のあるのは、一にはこれが爲である。武士の生命とする所は犠牲的精神にある。名を惜しんで命を惜しまず、君の馬前に討死することを以て無上の光榮となし、壯烈鬼神をも泣かしめるのである。嗚呼櫻花美と武士美とは、二にして一、一にして二、神州正大の

靈氣凝つて此の花となり、此の人となつたのではあるまいか。
〔倫理と國民道德〕

相馬御風
文學者。名は
昌治。明治十
六年新潟縣生。

二 感想二一篇

一 愛語

相馬御風

私の知つてゐる一人の若い外科醫がある。彼は専門の學術を修めた所謂立流なお醫者様である。彼は今彼の父と共に醫院を經營してゐる。しかし、彼の父は、年も既に七十に近い、正統な學問などをしたことのない、所謂舊式なお醫者様である。それであるにも拘らず、此の所謂新式な立派なお醫者様よりも、其の所謂舊式な素人醫者のやうな老父の方に、より多くの患者がある。それについて或時その若い外科醫は、私にこんなことを話したことがあつた。
君、吾々の仕事は、學問や技術だけではだめだよ。それについて近

頃僕が成程と感じたことが一つある。それは或時腫物の出来た一人の患者が来て、僕が見てやつたのだ。そして僕はそれを見るなりすぐに、「これは切らなくてはだめだから切つて上げよう。」とやつた。ところが、患者は突然泣出して、「私は死んでも切るのはいやです。」と言ふんだ。そして僕がいかに説いて聞かせても、頑として應じない。しかも最後に、「それでは今一應大旦那様に見ていただくわけにはありませんまいか。」と言ふんだ。僕も同じ事だとは思つたが、仕方なしに父を呼んで来て見せたのさ。

ところが、父はいかにも丁寧らしい見方をして——僕達から見れば、してもしなくてもいゝやうな事までして——最後にかう言つたもんだ。

「これは今の中に口をあけないといけなから、一つ忤に口をあけさせて上げませう。」

ところが君、患者はいかにも安心したらしい様子で、「それではどうぞさう願ひしたうございます。」と言ひ、前とは反對に僕の所へやつて来たよ。僕もその時ばかりはすつかり父に敬服してしまつた。「切る」も口を開ける「も」同じ事だ。しかし、言葉から来る感じは全く違ふ。「成程……」と僕はつくづく感じ入つたわけさ。

此の話は、私には深い感動を與へた。そして世の中にはこれと同じやうな事が、他にも數限りなくあることを、今更の如く考へて見た。これは決して單純に言葉の上だけの問題ではない。〔野を歩む者〕

二 獨樂のすわり

私の家の今年四つになる女の子は、妙に獨樂を廻すのが好である。しかし、まだ自分の手で廻すことがよく出来ない。それで時々私は彼女の爲に獨樂の廻し役を勤めさせられる。

ところが、さうして時々獨樂を廻し、してゐた間に、私は今まで

氣のつかなかつた一つの興味ある事實を見出した。それは獨樂がみづからのすわり場所を得るまで、あちらこちらと動き廻つてゐるが、一旦すわり場所を得ると、いかにも安らかに力の盡きるまで廻る、その事である。

かう言つたらば、或はそんなつまらぬ事を。」と笑つてしまふ人が少くないであらう。なるほど、考へやうによつてはまことにつまらないことであらう。しかし、心して獨樂のさうした廻り方を眺めることの興味を覺えてからといふもの、私にはそれがたまらなく面白くなつて來た。すわり場所を得ない獨樂の廻り方と、その二様の獨樂の廻り方を比べて眺めてゐるだけでも、私には少からぬ興味がある。

〔野を歩む者〕

三 詩 境

夏 目 漱 石

夏目漱石
小説家。名は
金之助。東京
市の人。大正
五年歿、年五
十。



夏 目 漱 石

山路を登りながらかう考へた。
智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮

屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが嵩じると、心安い所へ引越したくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れ畫が出来る。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれ程か寛げて、東の間の命を東の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。

住みにくい世から住みにくい煩を引抜いて、あり難い世界を目のあたり寫すのが詩である。畫である。或は音樂彫刻である。細にいへば寫さないでもよい。只目のあたりに見れば、そこに詩も生き歌も湧く。着想を紙に落さずとも、鏘々の音は胸裏に起る。丹青を畫架に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只己が住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに、澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なくとも、かく人世を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脫し得るの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得るの點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

突然、余の右足は坐りのわるい角石の端を踏損つた。平衡を保つためにすはやと前に出した左足が、仕損じの埋合せをすると共に、余

の腰は具合よく方三尺程な岩の上に下りた。肩に掛けた繪の具箱が腋の下から躍り出しただけで、幸と何の事もなかつた。

立上る時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せたやうな峯が聳えて居る。杉か檜か判らないが、根元から頂まで悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤くだんだんに棚引いて、繼目が確と見えぬ位に靄が濃い。少し手前に禿山が一つ群を擡いて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたのか、鋭い平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへはつきりして居る。行手は二町程で切れて居るが、高い處から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登れば彼處へ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならすだけなら、さほど手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平にしても石は平にならぬ。石は碎いても巖は始末がつかぬ。掘り崩した土の上に悠然と峙ち、我等の爲に道を讓る

様子は無い。向うが承知しなければ、乗越すか廻らなければならぬ。巖のない處でさへ歩きよくはない。左右が高くなつて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、その頂點が眞中を貫いて居ると評してもよい。路を行くと云はうより川底を涉ると云ふ方が適當だ。元より急ぐ旅ではないから、ぶら／＼と七曲にかゝる。

忽ち足下で雲雀の聲がした。谷を見下したが、何處で鳴いて居るか影も形も見えぬ。只聲だけが明らかに聞える。せつせと忙しく絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されて、居たたまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴き盡くし、又鳴き盡くさなければ氣が濟まんと見える。その上何處までも登つて行く、何時までも登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて漂うて居る中に、形は消えてなくなつて、只聲丈が空

の裡に残るのかも知れない。巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆様に落ちる所を、際どく右へ切れて横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。次には落ちる雲雀と上る雲雀とが、すれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時にも上る時にも、またすれ違ふ時にも、元氣よく鳴き續けるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體がなくなる。只菜の花を遠く望んだ時に目が覺める。雲雀の聲を聞いた時に魂の在所がはつきりする。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲に現れたものの内で、あれほど元氣のある者はない。あゝ愉快だ。かう思つてかう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の内で覺えた所だけ誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。その二三句の

シェレー

英國の詩人。

一七九二—

一八二二。

カハシヤウデトカカレシ

中にこんなものがある。

前を見ては、後へを見ては、物欲しと憧るゝかな、われ。

腹からの笑といへど、苦しみの底にあるべし。

美しき極みの歌に、悲しさの極みの想籠るとぞ知る。

成程幾ら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不亂に前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にもよく萬斛の愁などいふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲も多からう。そんなら、詩人になるのも考へものだ。

暫くは路が平で、右は雑木山、左は菜の花の見續けてである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸のやうな葉が遠慮なく四方へのし

て、真中に黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣を取られて踏みつけた後で、氣の毒な事をしたと振向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸の中に鎮座して居る。暢氣なものだ。又考を續ける。

詩人には憂は付きものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、只嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、櫻も——櫻は何時か見えなくなつた。かう山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

併し苦しみのないのは何故だらう。只この景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。只此の景が——腹の足しくしにもならぬ、月給の補にもならぬ

この景色が、景色としてのみ余が心を樂しませるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力はこゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

〔草枕〕

田尻稻子
明治三十三年
神奈川縣生。

四 風に吹かれる草

田 尻 稻 子

私は一本の草であります

私は廣い野に立つて居ります

野の上を絶えず風が渡つて行きます

そして私やあたりの草を縦横に亂して行きます

私は蔭にあつてこの風を受けずに眞直に立つてゐたいと

思ひますけれども

風は意地悪く根元の方まで吹込んで來て

私をぢつと立たせておいてくれません

私は風が嫌ひであります

風に吹かれるといふことは死ぬより厭なことだと思ひま
す

廣い野の中には

風に吹かれて 姿のよいものや

一しほしなやかさを増して見よくなるものもあるでせう

けれども

私は靜かに立つてゐたいと思ひます

どんなに風が吹いても

私だけは動くまいとしますけれども

こんな細い弱い體は

ちよつとした風にもそよぎます
外のもものが動くとやはり私も動きます
自分では動かないつもりでも
いつの間にか身を震はして同じやうに動いてゐます

私は誰かに頼まうと思ひました——
あなたの静かな庭に移して下さい——
また月のよい夜など
空に向つて訴へようかと思ひましたが
氣の弱いものは
あたりを憚つていへませんでした
私はいつまでこゝに立つて

いつまで風に吹かれてゐるのでせうか
ほんの一日でも
風といふものが全く止んでくれたらどんなによからうと
思ひます
果から果まで
この廣い野の草が一本も揺れなかつたら
どんなに穩かだよからうと思ひます
日の出る時から月の出るまで
何を思ふゆとりもなく
無駄に過ぎて行く時を見送るのは惜しくてくゞなりませ
ん

交野 河内北河内郡
またや見ん交野のみの櫻
春の曙の雪散る藤原俊成

嵐の山 朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人そなき藤原公任

關の清水 逢坂の關の清水に袖ぬれて今やひくらん望月の駒(紀貫之)

駒もとゝろと 貢物たえずそなふる東路の瀬川の長橋音もとゝろに(平兼盛)



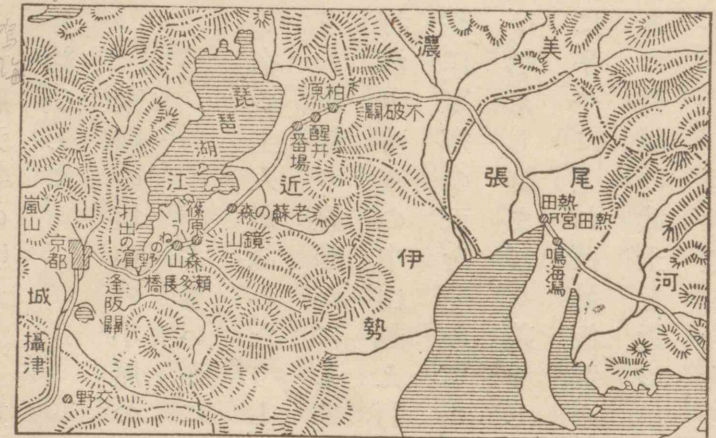
五 落花の雪

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寝となれば物憂きに、恩愛の契浅からぬ、我が古里の妻子をば行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出て給ふ、心の中ぞあはれなる。憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮沈み、駒もとゝろと踏鳴らす、

うねの野 近江より朝立ちの野にたづね鳴くなるあけぬこの夜は(古今集)

時雨も 白露も時雨も白くも時雨もはいたくもる山色づきにけり(紀貫之)

不破の關屋 人住まぬ不破の關屋の板は荒れに後にはた秋の風(藤原良經)



なるみ瀉、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末は何處と遠江、濱名の橋の夕汐に、曳く人も無き捨小舟、沈み果てぬる身にしあ

五 落花の雪

元暦元年
後鳥羽天皇の
年號。

れば、誰かあはれと夕暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。
元暦元年の頃かとよ、重衡中將の東夷の爲に囚はれて、此の宿に着
き給ひしに、

東路の埴生の小屋のいぶせきに

古里いかに戀しかるらん

と、宿の主人が詠みたりし、其のいにしへの哀までも、思ひ残さぬ涙な
り。旅館の燈幽かにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を
打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲道を埋み來て、其處とも知らぬ夕
暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつゝ、再
び越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日既
に亭午に上れば、乾飯進らす程とて、輿を庭前に舁き止む。轅を敲
きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と
答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によりて、宗行卿關東

命なりけり
年たけてまた
越ゆべしと思
ひきこ命なり
けり小夜の中
山。

承久の合戦
承久三年。

宗行卿

中御門中納言
藤原宗行。

南陽縣

支那南陽縣の
故事。上流に
ある菊の滴が
流し落ち、の
を、酌んで飲
むと長壽を得
るといふ。

へ召下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水、汲下流而延齡。

今東海道菊川、宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が
身の上になり、哀やいとまさりけん、一
首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきく川の

おなじ流に身をやしづめん

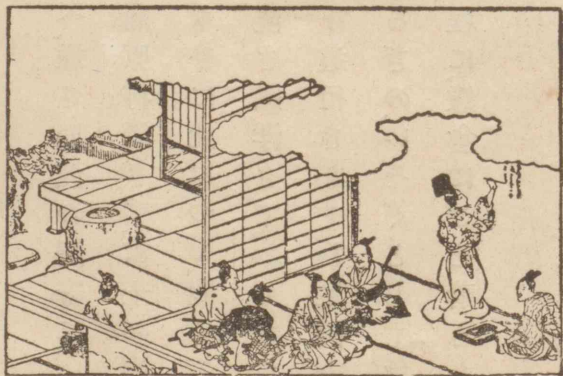
大井川を過ぎ給へば、都にありし名を

聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛り、

龍頭鶴首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍

りしことも、今は二たび見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。島田・

藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛裏枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を



(會圖所名道海東) 宿川菊

龜山殿
山城葛野郡嵯
峨の龜山離宮。
今の天龍寺。

夢にも人に
駿河なるうつ
の山べのうつ
つにも夢にも
人にあはぬな
りけり。(伊勢
物語)

上なき思ひ
富士の煙
はなほそ立ち
のぼる上なき
ものはおもひ
なりけり。(古
今集)

太平記
後醍醐天皇以
後南北朝戰亂
の次平定し
た軍記物語に
室町時代の作
小島法師の作と
傳へられてゐ
る。

越えゆけば、蔦かつらいと茂りて道もなし。昔業平の中將の住む所を求むとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。
清見瀉を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いと涙を催され、向ひはいづこみほが崎、興津蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見たまへば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、汐干や浅き船浮きて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯、小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着きたまひけれ。〔太平記〕

六 聚落第の行幸

荒木田麗女

聚落第
豊臣秀吉の營
んだ邸第。今
の京都市上京
区内にあつて
善美比類がな
かつたといは
れてゐる。

荒木田麗女
女流史家。號
清渚。伊勢の
神主荒木田武
遇の女。文化
三年歿。年七
十五。

今年
天正十六年。
内
後陽成天皇。
關白殿
豊臣秀吉。
祭
賀茂の祭。

殿
關白殿。
上
後陽成天皇。



豊臣秀吉

今年、春の寒さの例よりも堪へ難くて、花待遠に雪尙打散りて、谷の鶯も古巢を出てがてに休らへる程なりしかば、彌生に至りて、俄かに行幸も延びつゝ、卯月にぞなりはべる。内には心元なからせ給へど、關白殿は、「日影も麗かにて、鳥の音もくだけたらん折にこそ。」と申させ給ひき。何時しかと春も過ぎて、衣更の御粧涼しげにて、御簾の追風も花の香残らぬころほひしも、内には祭の御使何くれと忙しき程なるに取しませて、行幸は十四日とぞ聞えし。關白殿の御許には、いとゞしき玉の臺を光るばかりに磨き添へ給へり。
其の日になれば、殿つとめて内に参り給ひて、奉行の職事召して、有るべき事ども仰せらる。職事、事ども具しぬる由奏し奉りければ、土、南殿に出てさせ給ふ。御装束麗しう調へさせ給へり。長階の御う

慶親の中將

藤原氏、左中將。

充房の辨

藤原氏、右大辨。

御母准后

贈右大臣勳修寺晴右の女、藤原秀子。

六のみこ

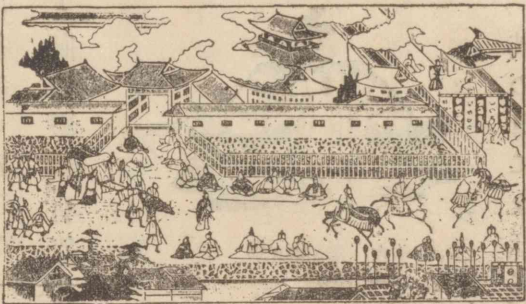
後陽成天皇の御子知仁親王。

芳野

又吉野、大和吉野郡。

立田

又龍田、大和生駒郡。



聚落第行幸

しろまで筵道參る。御鳳輦は御はしの間まに寄せたるに、奉るまで殿さぶらひ給ふ。御劍は慶親の中將、御草鞋は充房の辨なり。左右の

大將、御綱のすけなど例の如く勤む。御母准后、女御殿は御輿に奉る。内侍典侍、勾當、御乳母達を始め、御かたがたの女房まで御輿五十七ばかりにて、御供の人々童姿まで花やかに出立ちたり。宮達は六のみこ、伏見殿なり。公卿殿上人、武將、殘なく仕うまつる。殿は少し引下げて渡り給へる、是も御輿に奉る。衛府の武士共えもいはずさうぞきて、まへ、しりへに従ひたり。行幸に仕うまつり給ふ人々は、今日を晴とまうけ給へる御裝束なれば、中々言の葉にも盡くし難く、芳野、立田の春秋を一時に見るばかりにて、何れが何れと勝り劣れる

安城樂

雅樂の曲名。

みつばよつば

この殿はうへもとみけりさきくさのみつばよつばに殿づくりせり。
(催馬樂)

伯の三位

神祇伯白川王。

漏る白玉の聲

漏刻の水の落ちる音。

けぢめなきは、まねびやらんもかたはらいたきばかりなり。樂人は道のほど安城樂を奏したる、いとめづらかなり。

おはし着かせ給へば、みつば、よつばの中に寄せて下りさせ給ふ。おほみき、供御などの御まうけまで、世に無き清らを盡くし給へり。御前の奉り物は更にも言はず、宮達、准后、女御殿、女房達、公卿殿上人まで、殘なく物奉り給ふ。御かはらけ數多たび巡りて、夜に入りぬれば、御まへの遊始まり、御琴ども參り渡す。さうの琴は一條殿、四辻大納言、庭田の中納言、四辻中將、飛鳥井中將、琵琶は伏見の宮、菊亭の大臣、御子の中將、笙は大炊御門大納言、伯の三位、五辻左馬頭、拍子は持明院の中納言など聲加へ給ふ。更行くまゝに、松風も通ひ來て、月の光も一入澄みまさりければ、上も御琴など遊ばす。言ふ限り無く面白き夜の御遊なり。やう／＼更過ぎて、漏る白玉の聲も屢聞えければ、人々もまかて給

ひ、上もおほとのごもれり。夜の御座のまうけなど、いと細やかにしなされたり。又の日、君達急ぎ参り給へば、朝政行はせ給ふ。十六日には、曙ほどより曇らはしう見えけるに、やがて雨注ぎ出でたり。「今日は歸らせ給はんことも如何。」など、人々も申し給ふに、殿はた強ひて留め奉らせ給へば、さて在しまししに、しめやかなればとて、和歌の披講あり。題は「松に寄する祝」とぞ聞えし。

御製

わきてけふ待つかひあれや松が枝の

よゝのちぎりをかけて見せつゝ

六の宮

ちぎりあれや君待ちえたる時つ風

千代をならせるにはの松が枝

伏見宮

治まれる時とはしるし松風の

木ずゑに呼ばふよろづ世の聲

關白殿

萬代の君が行幸に馴れくゝん

みどり木だかきのきのたま松

樂所にはいみじき物の音を調べたり。舞どもなまめかしう面白し。採桑老舞ひたる程、上も殊に興ぜさせ給ひて、白き御衣賜はせけり。大臣とりてかづけ給ふ。暮果てて、おほとなぶら参る程、院より關白殿に御使あり。

よろづよにまた八百萬代を重ねても

なほかぎりなき時は此のとき

殿驚き畏りて、

言の葉の濱のまさごは盡くるとも

採桑老
舞樂の曲名
院
正親町上皇

かぎりあらじな君がよはひは 「池の藻屑」

七 苦しき人々 長塚節

長塚節
小説家、歌人。
茨城縣の人。
大正四年歿、
年三十七。

糶種がぼつちりと水を突上げて萌え出すと、漸く強くなつた日光に緑深くなつた嫩葉がぐつたりとする。

軟かな風が涼しく吹いて、松の花粉が埃のやうに濕つた土を掩うて、小麥の穂にもびつしりと微のやうな花が附いた。百姓は



長塚節

皆自分の手足に不足を感じる程忙しくなる。勘次は一意只仕事の手遅れになるのを怖れた。草臥れても疲れても、彼は毎日未明に起きて、夜まで其の手足を動かして止まぬ。おつぎもその後を跟いて、草臥れた身體を引きずられた。晚餐の支度に、與吉を負うて先へ歸るのが、おつぎにはせめてもの骨休めであつた。

勘次は麥の間へ大豆を蒔いた。畦間へ浅く堀のやうな凹みを拵へて、そこへぼろ／＼と種を落して行く。勘次はぐい／＼と畦間を掘つて行く。後からおつぎが種を落した。おつぎのまだ短い身體は、麥の出揃つた白い穂から僅かに其の被つた手拭と肩とを表して居る。與吉は道の側の薦の上に大人しくして居る。おつぎの白い手拭が段々麥の穂に隠れると、與吉は「姉よう。」と喚ぶ。おつぎは「おうい。」と返辭をする。おつぎの聲が聞えると、與吉はぢつとして居る。勘次は畦間を作りあげて、それから自分も忙しく大豆を落し始めた。勘次は間だるつこいおつぎの手もとを見て、其の畝をひよつと覗いた。種と種との間隔が不平均で、四粒も五粒も一つに落ちてゐる處があつた。

「此のざまはどうしたんだ。こんなこつて生計が出来るか。」と怒鳴りながら、彼は突然おつぎを擲つた。おつぎは麥の幹と共に倒れ

た。おつぎは倒れた儘しくくと泣いた。

「大概解りさうなもんぢやないか。こんなざまぢや種ばかり要つて仕やうありやしない。」勘次は後を呟いた。隣の畑にこれも大豆を蒔いて居た百姓が駈けて來た。

「勘次さん、どうしたもんだい、まあ、そんな荒つばいことして。」と勘次を抑へた。

「おつぎ泣かないで、さあ起きて仕事しろ。おとつあんに謝罪つてやるからなあ。與吉が泣いてら、さあ行つて見さつせ。」百姓は更におつぎを賺した。與吉はおつぎの姿が見えないので、頻りに叫んだ。それでもおつぎの聲は聞えないので、火の點いたやうに泣出したのである。おつぎは啜り泣きしながら與吉を抱いた。

「お袋もないのおまへい、加減にしろよ、可哀さうぢやないか、そんなことをしておまへ幾つだと思ふんだ。さう自分の氣のやうに

出来るもんぢやない、佛の障にもなるだらうぢやないか。隣畑の百姓はいつた。勘次は黙つて了つて何ともいはなかつた。與吉はおつぎに抱かれたので、おつぎの目がまだ濕うて居るうちに泣止んだ。勘次は其の日の夕方、おつぎが晚餐の支度に立つた時、自分も一緒に家へ戻つた。

彼は膝がしらで四つ匍に歩きながら、座敷へあがつて、財布を懐へ振込んでふいと出た。彼は風呂敷包を持つて歸つた。彼が戸口に立つた時は、家の内は眞闇で、ちよつと物の見分もつかなくなつた。草臥れ切つた身體で、彼は其の夜も二人を連れて、自分の所有ではない其の茂つた小さな桑畑を越えて南の風呂へ行つた。其處にはいつものやうに風呂を貰ひに女房等が聚つてゐた。

「よくなあ、おつうはよき、の面倒を見るな。女の子は斯うだからいいのさな、直ぐ役に立つからな。」女房の一人がいつた。

よき
與吉。

「おつぎはどうしたんだい、今夜ひどく威勢悪いな。」他の女房がいった。

「先刻俺に打つとばされたからでもあらうよ。」勘次は苦笑しながらいった。

「何といふことだ。おまへそんなにしないで面倒見てやりなさいよ。これがおまへ女の子でもなくつて見さつせえ、こんな小さいの抱へて仕やうあるもんぢやない。」

「さうだともよ、こらおつうでも無くつちや育たなかつたかも知れないぞ。それこそ因果見なくつちやならないや、なあおつう。」女房等はいつた。

「俺がとこ、ちつともこら離れないんだよ。仕やうないんだよ本當に。」おつぎはもう段々手に餘つて來た與吉を膝にしていつた。

「今ぢや、まるつきしおつかのやうな氣がしてるんだな、きつと。」女房

等はまた與吉を見ていつた。勘次は側で只目を瞬いた。

家へ戻つてから勘次は、

「おつう、手ランプを持つて來て見せろ、汝に見せるものがあるから。」おつぎは出る時に吹消したブリキの手ランプを點けて來た。まだ容子がはきくとしなかつた。勘次は先刻の風呂敷包を解いた。小さく疊んだ辨慶縞の單衣が出た。

「汝にこれ遣らうと思つて持つて來たんだ。これでもなよ、おつかが地絲で織つたんだぞ。今ぢや絲なんぞ引くものはないが、おつか等毎晩のやうに引いたもんだ。紺もなあよく染まつてるから丈夫だぞ。おつかは幾らも着ないでしまつたのだから、まだまるつきり新しいやうだ。どうした手ランプもつとこつちへ出して見せえまあ。」勘次は單衣を少し開いて鼻へ當てて臭を嗅いで見た。

「ちつとは黴臭くなつたやうだが、それでも是位ぢや一日干せば臭

いのは直るから。」勘次は分疏いんさでもするやうにいった。

おつぎは左手に持ち換へた手ランプを翳して、單衣を弄つては浴後のつややかな顔に微笑を含んだ。勘次はおつぎの顔ばかり見て居た。さうして其の機嫌が恢復しかけたのを見て、

「どうだ、それでも氣に入つたか。おつかが物はみんな汝がもんだからな、俺汝のがだとなりや、幾ら困つたつて、決して質になんぞ置かないから、大事にして汝ようく藏つて置けよ。」と彼は満足らしく見えた。おつぎは手ランプを置いて勘次がしたやうに鼻へ當てて臭を嗅いで見たり、左の手だけを袖へ通して見たりした。

「俺がにはこれぢや引きずるやうぢやあるまいか。」おつぎはそれから手で吊して見たりした。

「藏つて置いて、俺もつと大きく成つてから着ようかな。」

「どうでも汝がもんだから汝が好きにしるな。」勘次はおつぎの手

が動くに従つて目を移した。手ランプのぼうと立つ油煙が、ほぐれた髪へ靡き掛るのも知らずに、おつぎはそつちこつちへ單衣を弄つて居た。

「汝うつかりして、そうれ燃えつちまふぞ。」勘次は油煙が復傾いた時、慌てておつぎの髪へ手を當てていつた。〔主〕

ハ 父及び子として

小林 一 茶

一 をさな兒

こぞの夏、竹植うる日の頃、憂き節繁き浮世に生れたる女、物に敏かれとて名をさと呼ぶ。ことし誕生日祝ふ頃ほひになり、てうちてうち、あは、おつむてん、かぶり、振りながら、同じき子ども風車といふもの持てるを、頻りに欲しがりてむづかれば、とみに取らせけるに、やがてむしやく、しやぶつて捨て、露程執念なく、直に外の

小林一茶
俳人。名は彌
太郎。信濃の
人。文政十年
歿、年六十五。

物に心移りて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめりくく、むしるに、よくした、よくしたと褒むれば、誠と思ひ、けらくくと笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心の中一點の塵もなく、名月のきらしく清く見ゆれば、なか／＼に心の皺を伸ばしぬ。

又、人の來りて「わん／＼はどこに。」と言へば、犬に指さし、「かあかあは。」と問へば、鳥に指さす様、口元より爪先まで愛敬こぼれて愛らしく、春の初草に胡蝶の戯るゝよりも優しく覺ゆ。

折から門に月さしていと涼しく、外にわらべの踊の聲のすれば、直ちに物投捨て、片ゐざりにゐざり出でて、聲を上げ手眞似して嬉しげなるを見るにつけ、いつしか彼をも振分髪のたけになして、踊らせてみたらんには、二十五菩薩の管絃よりも遙かに優りて興あるわざならんと、我が身に積る老を忘れて、うさをなん晴らしける。

斯く日すがら小鹿の角の束の間も手足を動かさずといふことな

くて遊び疲るればにや、朝は日のたくるまで眠る。其のうちばかり母は飯炊ぎ、そこら掃き片付けて、やがて閨に泣聲のす



像畫自茶一

るを目の覺むる相圖と定め、手がしこくも抱き起して、乳房あてがへば、すは／＼と吸ひながら、胸板のあたりを打叩きて、にこ／＼笑ひ顔を作るに、母は長き胎内の苦しみも日々の襁褓の穢はしきも打忘れ、手の中の玉と撫でさすりて、一人喜ぶありさまなりけらし。

蚤のあと數へながらに添乳かな 「おらが春」

二 ひとり日記

五月四日。

きのふに打變りて顔麗はしく、「何ぞ食べたき。」などいはるゝに、嬉

五月四日
享和元年。

しき限りなく、よべの藥のしるしに親のよみがへりたる心持して、かたくりなど練りて參らせける。道有も、此のおもぶきにて變りの來らざれば、程なく快氣なるべし。」となんいはるゝに、枕につき添ふおのれも、やゝ安堵の思をなしぬ。道有老かへりたまふに、古間の里まで見送り侍る。雨雲も西へ東へかたづきて、空の様此の上なうめづらしく、時鳥の初音、折得顔に告げわたる。此の鳥、疾くにも鳴きつらんに、父の異例の日より、日は日すがら夜は夜すがら心を空にして事へはべれば、魂狂ふごとくにして、聞きつるは今日始めての心地なりき。

時鳥我も氣あひのよき日なり

涼めとの許しの出たり門の月

五月十日。

しきりにありの實をたうべたきとむづかり給へば、此の邊の所縁

あるも無きも親しき限り、富みたる家、心あたりある門、聞きつくし尋ね探し盡くすといへども、ありの實一つ貯へたる人としもなく、夏さへ淋しき山國なりき。けふは藥の絶え間なれば、善光寺へ行かまほしく、曉に支度して門を出づるに、皐月の空もほのく、晴れて、白雪は太山にあるからに、青葉がくれの花は春を残して種蒔の山人懐かし



一茶筆蹟

其の昔
安永五年。一
茶十四歳の時。

く、時鳥の三聲、二聲も此上なく時得顔なるに、なじかは心晴れぬ曙なりけり。卯の下刻、牟禮てふ驛に到るに、こは其の昔一茶、江戸へおもぶける日、父の翁見送り給ひし里なりけるが、今は二十四年の昔なりき。河の音、坂の形もほのかに心覚えありて、何となく嬉しけれど、人は知らぬ顔のみとなりけり。

醫師の家に居ませる内にと、足を早めければ辰の刻許りに善光寺に着く。醫師は未だ朝飯ころほひと見えて、道有老の聲かしこに聞えければ、とみに病のさまを語りけるに、聽てかうがへの匙とりて御薬合はせて給はりけり。抑此の地は、御佛の淨土にしあれば、肆は軒をあらそひ、幌は風に飜り、入る人、出づる人、國々より遙々歩を運びて、未來成佛を願はぬ人もなく、おのれは今日父の命をうけて御薬使はた梨を探しに來つるなれば、此の役濟まさざらん内は、御佛も遙拜して、天を翔り地を潛りてなりとも梨一つ得まほしく、ある程の乾物店ある程の青物店を足を空にして驅巡るに、悲しさは片割一つありともきこゆる人もなかりき。昔、雪中に筍を掘り、氷上に魚を求めたためしもあるに、われ梨一つ得ること能はざるは、皇天我を捨てたまふや、佛神我を見限りたまふや、一世ばかりの不孝にはあらじ。父は嘸梨を待ちて居たまはん。此の儘に歸りて、父を何と慰めんと思へば、

雪中に筍、氷上に魚
漢土の二十四孝の故事。

胸せきふたがり、忍びおつる涙は大道をうるほし、往來の人の狂者と笑はんも恥づかしく、しばらく手を組み、頭をうなだれて心を鎮めける。此の地に無きものいづちにかあらん。たゞ一足も早く戻りて、薬ばしすゝめんと、手を空しく吉田てふ里に來れるに、木立の山鴉三つ、四つ、二つ、我を見ては聲立つるに、何となく父の身の上の心にかゝり、息もつきあへず足を早めし程に、山の日影は八つ時といふ比、宿に戻る。父はいつより顔麗はしく、笑をふくみたまふにも、梨を得ざること語らば、又や氣色をそこなはん。とやせんかくやせんと躊躇ふに、父の聞きたまへば、ありのまゝを答ふ。翌や高田へ參りて尋ね來りてまゐらすべし。と、しら雲のよすがもなき根なし事をいひて父を宥め奉れるは、本意なき夕なりけらし。

五月二十三日。

三月のゆふべは逢うて盃を戴く、今朝の別れは悲しき白骨を拾ふ。

喜怒哀樂はあざなへる繩の如く、別るゝ世の中今更驚くべき事には
あらねど、今までは父を頼みに故郷へは來つれ、今より後は誰を力に
ながらふべき。心を引かさるゝ妻子もなく、磨る墨の水の泡よりも
淡く、風の前の塵よりも輕き身の境界なれど、たゞ斷ちがたきは玉の
緒なりき。

生き残る我にかゝるや草の露

晝は人々寄りつどひ力を添ふる物語に、しばし悲しびを忘るゝに
似たり。夜は人々もおほかた戻りて、灯火のあかきにつけても、病床
の邊のなつかしく、あからさまに寝たまひし父の目覺むるを待つ心
地して、悩みたまふ顔は目を離れず、呼びたまふ聲は耳に残りて、

夜な〜にかまけられたる蚤蚊哉

行く水、再びかへらず、石の火の石にかへらず、八千度悔ゆともかひ
なき事にしあれど、頼みと思ふ縁由も皆枯果てて、知らぬ國に一人放

たれし如く、便なき孤の一茶が心の内、思ひはかられて哀れなりき。

二茶遺稿

九 折節のうつりかはり 吉田兼好

折節のうつりかはるこそ、物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋

こそまされと人毎にいふめれど、それもさ
るものにて、今ひとときは心も浮立つものは
春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもこ
との外に春めきて、のどやかなる日影に、垣
根の草もえいづる頃より、やゝ春深く霞み
渡りて、花もやう〜けしきだつほどこそ

あれ、折しも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散り過ぎぬ。青葉に
なり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ悩ます。花橘は名にこそ負



吉田兼好

吉田兼好
文學者。正平
五年没、年六
十九。
物のあはれ
春はたゞ花の
ひとへに咲く
ばかり物のあ
はれは秋ぞ優
れる。拾遺
集、讀人不知

花橘
五月待つ花橘
の香をかげば
昔の人の袖の

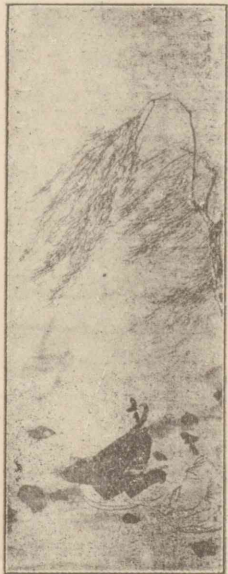
香ぞする。古今集。讚人不知。梅の匂。色よりも香。そあはれと思ふ。ほゆれたが袖ぞも。宿の梅。集。讚人不知。古今

祭 賀茂の葵祭。

人のこひしさをわが宿の花見がてらに來る人は散りなん後ぞこひしかりけち。凡河内躬恒。

へれ、なほ梅の匂にぞ、古のことも立返りこひしう思ひ出でらる。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたきこと多し。

「灌佛の頃、祭の頃、若葉の稍涼しげに茂り行くほどこそ、世のあはれも人のこひしさもまされ。」と、人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水雞のたゞくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見え、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月被またをかし。



(筆川百影) 六月

七夕まつるこそなまめかしけれ。やうく、夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、早稲田かりほすなど、取集めたることは秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさく、劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとままりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。

年のくれ果てて人毎に急ぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやんごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて催し行はるゝさまぞいみじきや。

追儼より四方拜に續くこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の門たゞき走りありきて、何事にかあらん、ことごとく、しくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほす

御佛名 十二月十九日 から三日間佛名を唱へる公事。荷前の使 年の末、十陵八墓に幣帛を奉らせられる勅使。追儼 十二月晦日の夜、惡鬼を追ふ公事。四方拜 元旦寅の刻に、元且が四方及び山陵へ拜し給ふ儀式。

ることにてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそまたあはれなれ。〔徒然草〕

一〇 行く川の流

鴨 長 明

ゆく川の流は絶えずして、しかもその水にあらず。よどみにうかぶうたかたは、かつ消えかつむすびて、久しく止まることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。

玉敷の都の中に棟をならべ、薨を争へる、高き卑しき人のすまひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所もかはらず人も多かれど、いに

鴨長明
歌人、文章家。
遠江の人。建
保四年歿、年
六十三。

しへ見し人は二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し夕に生まるゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず生まれ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。又知らず、かりのやどり誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を喜ばしむる。其の主人と住家と無常を争ひ去るさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるは露落ちて花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。あるは花しほみて露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つことなし。

こゝに六十の露消えがたに及びて、さらに末葉のやどりを結べることあり。いはば、旅人の一夜の宿を造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃のすみかにならずらふれば、又百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々に傾き、住家は折々に狭し。其の家の有様世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺き

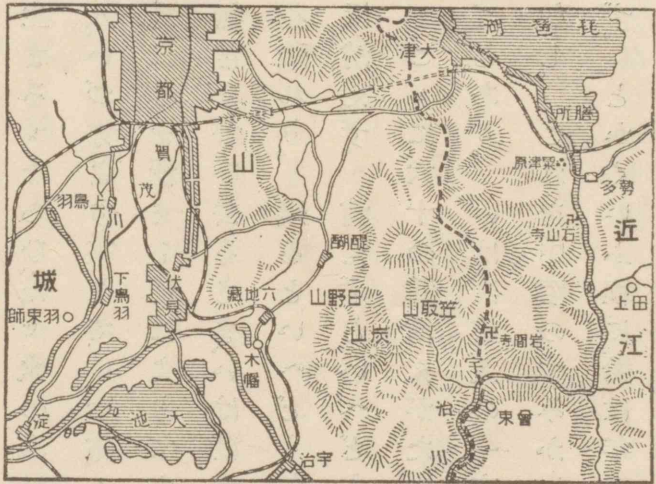
て、繼ぎ目毎に掛がねをかけたなり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さんが爲なり。其の改め造る時幾ばくの煩かある。積む所

僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらす。

いま日野山の奥に迹をかくして後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、其の西に闕伽棚を作り、うちには西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。即ち和歌管絃、往生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶

日野山
山城國宇治郡
木幡山の北。

往生要集
源信僧都の著。



各、一張を立つ。いはゆる折箏、つぎ琵琶これなり。東に沿へて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓を開けて、こゝに文机を出せり。枕の方にすびつあり、これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占めて、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろくの薬草を植ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。其の處のさまをいはば、南に竈あり、岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら迹を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり、觀念のたより無きにしもあらず。春は藤浪を見る、紫雲の如くにして西の方にほふ。夏は子規を聞く、かたらふ毎に死出の山路を契る。秋は日ぐらしの聲耳に満てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む、つもり消ゆるさま罪障に喩へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友

迹の白浪

世の中を何に
たとへん朝ほ
らげこぎゆく
船のあとをし
らなみ。

岡の屋

(拾遺集)

滿沙彌

山城國紀伊郡
沙彌滿誓、元
正天皇の時の
人。

潯陽の江

潯陽江頭夜送

客、風葉荻花

秋瑟瑟、白樂

源都督

桂大納言源經

手、琵琶の名

秋風・流泉

共に琵琶の曲

もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業ををさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなければども、境界なければ何につけてか破らん。もし迹の白浪に身を寄するあしたには、岡の屋に行きかふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉を鳴らす夕には、潯陽の江を想ひやりて、源都督のながれをならふ。若し餘りの興あれば、しばし松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。大かた此の處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今既に五とせを経たり。假の庵も稍ふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事の便に都の様を聞けば、此の山に籠り居て後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして其の數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。度々の炎上に亡び

たる家又いくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。

程せばしといへども夜臥す床あり、晝居る座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む、これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る、即ち人を恐るゝが故なり。われ亦かくの如し。

身を知り世を知れば、願はず、まじらはず、た

だ靜かなるを望とし、愁なきを樂とす。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安か

らずば牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望な

し。今さびしき住居一間の庵、みづから之を

愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ。

もし人このいへる事を疑はば魚鳥のありさまを見よ。魚は水にあかず、魚にあらざれば其の心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざ



明 長 鴨

れば其の心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさとりん。

そも一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽ちに三途の闇に向はん時、何のわざをかかこたんとする。佛の人を教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今草の庵を愛するもとがとす。閑寂に着するも障なるべし。いかが用なき樂をのべて、空しくあたら時を過さん。

しづかなる曉、此のことわりを思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心ををさめて道を行はんが爲なり。然るを汝の姿は聖に似て、心は濁にしめり。住家はすなはち淨名居士の跡をけがせりといへども、保つ所は僅かに周利槃特が行にだも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづからなやますか、はたまた妄心の至りてくるはせるか、其の時心更に答ふことなし。たゞ傍

淨名居士

維多詰のこと、方一丈の室に把居した。

周利槃特

釋迦の弟子、魯鈍の人。

建曆

順徳天皇の年號。

蓮胤

作者鴨長明の法名。

月影は

新勅撰歌集に出で、作者源季廣とある。

白鳥省吾

詩人。明治二十三年宮城縣生。

に舌根をやとひて、不請の念佛兩三遍を申してやみぬ。時に建曆二年三月の晦日ごろ、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれを記す。

月影は入る山のはもつらかりき
たえぬ光を見るよしもがな 「方丈記」

一一 六月の雲雀

白鳥省吾

露つばい丘邊の朝、

その畑中の路に立ちどまり、

雲雀が啼きながらあがるのをほこらしげに私は見た。

雲雀は環のやうに旋回しながら、

翼を耀かしながらのぼる。

おゝこの季節はづれの樂しげな無心の雲雀、

遠くいつしか土を離れて
重い愁をひく私は旅人。

一望の黒土の野はすでに麥刈がすんで、
萌え出た豆や薩摩芋に手入をしてゐる農夫たち
私と没交渉に點在する農夫たちの上に朝の日は温かい。

私は畑中の路を歩む。

大きい光る鍬をかついでゆく老農、

水のはひつた土瓶をさげてゆく少年、

荷車をひいてゆく乙女、

遠く霞が浦が見え利根川が見える。

叢には野茨の花が咲いて、

蛇は露にぬれてさはくくと草にかくれる、

私は葉のひらいた一本の蕨を折つて見る。

この丘はまるで夢幻郷のやうである、

土は豊饒らしく濃かて黒い、

雲雀はいつまでも旋回しつゝのぼる、

私は何かに取りのこされた嘆きを感じる、

私は見えざる神に挨拶する。〔日本詩集〕

一二 鹽原

尾崎紅葉

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は變れど、我は安からざる悒鬱を抱きて、遣方なき五時間のひとりに倦み疲れつゝ、始めて西那須野の驛に下車せり。直ちに西北に向ひて、今尙茫茫たる古の那須野が原に入れば、天は闊く、地は遐かに、唯平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の

尾崎紅葉
小説家。名は
徳太郎。東京
市の人。明治
三十七年
三月六日歿。
西那須野
下野國那須郡。

坦途、一帶の重巒、鹽原は其處ぞと見えて行く程に、路は窮まらず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くる處に淙々の響ありて、之に架れるを入勝橋とす。

橋を渡りて僅かに行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷かに、壑深く陥りて、幾廻りせる九折の後には、密樹聲々の鳥呼び、前には幽草歩々



尾崎紅葉

の花を開き、愈登れば遙かに木隠れの音のみ聞えし流の水は浅く現れて、すはや、此處に空山の雷白光を放ちて崩れ落ちたるかと凄じかり。道の右は山を削りて長壁となし、石幽に、蘇碧にして、幾條とも無く白絲を亂し懸けたる細瀧小瀧の珊々として灑げるは、嶺上の松の調も定めて此の緒よりやと、見捨て難し。

車を驅りて白羽坂を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑を踏みて、

松の調も
琴の音に峰の
松風かよふら
しいつれの緒
よりしらべそ
めけん。(拾遺
集齋宮女御)

山中の景は始めて奇なり。是より行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全逕にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村に

(十四)

官の屋敷
唯造の比治

(十五)

おのりまの
おのりまの

(十六)

おのりまの
おのりまの

(十七)

おのりまの
おのりまの

紅葉筆蹟

して四十五湯。尙數ふれば十二勝、十六名所、七不思議、一々探り得べくもあらず。

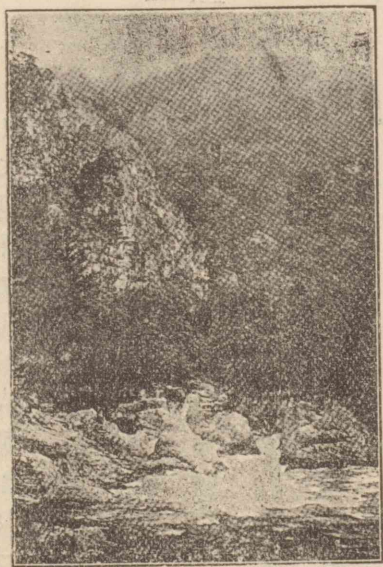
抑、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より羣峯の間を分けて深く西北に入り、縣々として箒川の流に浜る片そばにして、到る處

巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過ぐれば、根本山魚止瀑、兒が淵、左靱の嶮は古りて、白雲洞は朗かに、布瀑龍が鼻材木石、五色石船岩など眺め行けば、鳥

居戸前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。

それより前面に、幾百仞の巨巖嶙峋たる天狗岩の奇勝を仰ぎ、小夜の河原の激湍に怪石の磊砢たるを俯瞰し、途すがら崖の處々に咲残りたる躑躅山藤など打眺めて車を急がする程に、鹽釜の湯甘湯澤、小太郎が淵など夢のやうに過ぎて、何時か畑下戸の里に着きぬ。

一村十二戸、温泉は五箇所に湧きて、五軒の宿あり。此



鹽原

處に清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩く繞れる磧に臨み、俯しては水石の鄰々たるを弄び、仰げば西は富士、喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落來る流は二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂

れたる如き吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾深く、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉の奢を窮めらるゝなど、又有るまじき別境なり。

我は繪を看る如き此の清穩の風景に會ひて、彼の途上、嶮しき巖と激しき流との爲に、幾度か魂飛び肉銷して、理むる方なく搔亂されし胸の中は藹然として頓に和らぎ、恍然として凡て忘れてたり。

誠に能くこそ我は來つれ。何ぞ來る事の甚だ遅かりし。山の麗しと云ふも壤の堆きもののみ。川の暢けしと云ふも水の逝くに過ぎざるのみ。牢として抜くべからざる我が半生の痼疾は、争てか壤と水との醫すべきものならんと齒牙にも懸けず侮りたりし己こそ、先づ侮らるべき愚のものなれや。

見よ、木々の緑も、浮かべる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、峙つ巖も、吹來る風も、日の光も、雞の啼く音も、空の色も、皆自ら浮世の物なら

で、我は此處に憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身は彼の雲と
軽く、心は此の水と淡し。希はくは、今より此の如くにして我が生を
終へんかな。〔金色夜叉〕

一三 短歌選

落合直文

仙臺市の人。

明治三十六年
歿、年四十三。

落合直文

わが歌をあはれと思ふ人一人見出でて後に死なむとぞ思

ふ

與謝野鐵幹

名は寛。明治
六年京都市生。

與謝野鐵幹

心にも曉ありやいつしかにこの世たのしくわれになり來

ぬ

與謝野晶子

鐵幹の妻。明
治十一年、堺
市生。

與謝野晶子

五六人衣を裁てば初夏のにほひするなり白妙の絹

春の雨高野の山におん稚子の得度の日かや鐘多く鳴る
子らの衣皆新しく美しき皐月一日花あやめ咲く

佐々木信綱

明治五年三重
縣生。

佐々木信綱

何事も思ふとなしに行き行きて野邊の果にもなりにける

かな

尾上柴舟

名は八郎。明
治九年岡山縣
生。

尾上柴舟

夕靄は蒼く木立を包みたり思へば今日は安かりしかな

窪田空穂

名は通治。明
治十五年長野
縣生。

窪田空穂

踏みて行く笹原の笹さやくと裾に鳴りつゝ空の眞青き

北原白秋

名は隆吉。明
治十八年福岡
縣生。

北原白秋

枇杷の實を軽くおとせば吾弟らが麥藁帽にうけてけるか

金子薫園

名は雄太郎。
明治十年東京
市生。

金子薫園

若山牧水
名は繁。明治十八年宮崎縣生。

父に似る女の子はも幸ありときくからにやすき親心かな
○
いつとなく秋の姿に移り行く野の樹々を見よ靜かなれ心
林には一鳥啼かず木のかげにたふれて秋に身をひたし居
り

前田夕暮
名は洋三、明治十六年神奈川縣生。

○
青鯖の青き縞なす背に鱗にまみれし砂の目に新しき
秋の朝卓の上なる食器らにうすらつめたき悲ぞ這ふ

正岡子規

松山市の人。名は常規。又竹の里人と號した。明治三十五年歿、年三十六。

○
日和風そよ吹き過ぎて若松のむら立ち青芽むらゝ動く

伊藤佐千夫
千葉縣の人、大正二年歿、年五十。

○
日影去りて冷たくなりし靜けさを惜しむ思ひに默座つゞ
けぬ

長塚節
茨城縣の人。大正四年歿、年二十七。

○
おしなべて木草に露をおかんとぞ夜空は近く相迫り見ゆ
單衣着て心ほがらかなりにけり夏は必ずわれ死なざらん

島木赤彦

本名久保田俊彦。長野縣の人。大正十五年歿、年五十。

○
白銀の鍔うつ如ききりゝす幾夜は經なば涼しかるらん

○
萌黄の芽林にもえて健康の丹頬の少女を歩ませにけり
冬の日の光とほれる池の底に泥をかうむりて動かぬらろ
くづ

中村憲吉
明治二十二年廣島縣生。

○
雨くらし長押の額にとまりたる燕の羽より雫おちけり

齋藤茂吉
明治十五年山形縣生。

○
しんゝと雪降る中にたゞずめる馬の眼は瞬きにけり

久方の時雨降り來る空さびし土に下りたちて鴉はなくも
幼兒の遊ぶを見ればおのづから疊ねぶりをり何かいひつ
つ

尾山篤二郎

明治二十二年
金澤市生。

○ 尾山篤二郎

たなぞここにのする一葉の貴けさ朽葉よと呼べばうなづか
んとす

木下利玄

岡山縣の人。
子爵。大正十
四年歿、年四
十。

○ 木下利玄

草にゐてわりごひらけば眞上より野天の春日握飯を照ら
す

高村光太郎

明治十六年東
京市生。

○ 高村光太郎

海にして太古の民のおどろきをわれふたゝびす大空のも
と

森林太郎

號は鶴外。島
根縣の人。大
正十一年歿、大
年六十三。

○ 森林太郎

夕靄は宇治をつゝみぬちごあまた竝みゐる如き茶の木を
消して

石川啄木

名は一。岩手
縣の人。明治
四十五年歿、
年二十八。

○ 石川啄木

目になれし山にはあれど
秋來れば

神や住まんとかしこみて見る

たはむれに母を背負ひて

そのあまり輕きに泣きて

○ 三步あゆまず

○ 土岐哀果

散步にと出でしを何に急ぎけん

○ 佇めば街

○ 秋の風吹く

一四 狂歌と川柳

一 狂歌

宿屋飯盛

宿屋飯盛
小説家、國學者。石川雅望。文政十三年歿、年七十八。

歌よみは下手こそよけれ天地の

動き出してはたまるものかは

四方赤良

四方赤良

よものあから
太田氏、名は覃、號は南畝、蜀山人、四方山人等。江戸の人。文政六年歿、年七十五。

良 赤 方 四



山の横つらはる風ぞ吹く

時鳥なきつるあとにあぎれたる

後徳大寺のありあけの顔

つむり光

つむり光

通稱岸宇衛門、名は誠之、號は桑揚庵、寛政八年歿、年七十。

時鳥自由自在にきく里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

木 端

木端

丸子氏。又栗柯亭と號した。江戸の人。安永二年歿。

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

鹿都部眞顔

鹿都部眞顔

本名北川嘉兵衛。文政十二年歿、年七十七。

争はぬ風の柳の絲にこそ

勘忍袋縫ふべかりけれ

平秩東作

平秩東作

儒者、後に狂歌師。本名立松東蒙。尾張の人。寛政元年歿、年六十四。

行く春を思ひきれとや舞臺から

飛んで見せたる清水の花

鯛屋貞柳

鯛屋貞柳

本名板並善八、由烟齋とも號した。享保二十一年歿、年八十一。

富士の山夢に見るこそ果報なれ

路銀もいらざくたぶれもせず

唐衣橘洲

本名小島泰從、通稱源之介。田安侯の臣、享和二年歿、年六十。

菜もなき膳にあはれは知られけり

唐衣橘洲

しぎやき茄子の秋の夕暮

馬場金埒

雪ならばいくら酒手をねだられん

花の吹雪の滋賀の山越

二川柳

井戸端で身振が過ぎて下女すべり

駈けて来た程に娘の用はなし

花嫁は口をつぼみにして笑ひ

身の伊達に下女が髪まで結つてやり

衣類までまめてゐるか母の文

よく寝れば寝るととのぞく枕蚊帳

馬場金埒
通稱大阪屋甚兵衛、號は滄洲樓。文化四年歿。

ゆきたけのあはぬを母はうれしがり
雷をまねて腹がけやつとさせ
居候三杯目にはそつと出し
よいとこへ来たと背高使はれる
うらゝかさしきりに錢がほしくなり
傘借りに沙汰の限りの人が来る
おつかさん又越すのかと孟子いひ
泣くくもよい方を取るかたみ分
賣家と唐様で書く三代目

一五 芳流閣上の格闘

曲亭馬琴

古の人謂はずや、「禍福は糾ふ繩の如し。」と人間萬事往くとして
塞翁が馬ならぬは無し。こは福の倚る所はた禍の伏す所彼に在れ

曲亭馬琴
小説家、雜學者。本名瀧澤解。嘉永元年歿、年八十二。

禍福

禍之與福兮、
何異（漢書）糾纏（漢書）

福の倚る所

禍兮福之所

倚、福兮禍之

所伏、命不

可說、誰知

其極、（老子）

古河

下總猿島郡。

ば此に在りとは思へども、豫てより誰か其の極を知らん。憐むべし、犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心にしめつ身に着けつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、遙々古河へ齎して、名を揚げ家を興すべかりし其の福は、禍とふり換りたる村雨の、刀は故の物ならで、我が身を劈く讐とぞなりし、憾をこゝに釋く由もなく、緯急にして意外にあり。僅かに當座の辱を避けばやと思ふばかり、夥多の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に登れども、左右に脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を窮めたる、心の中は如何なりけん。想ひやるだにいと痛まし。

されば又、犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋かれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役義、犬塚信乃を搦めよとて、愁に擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあら

坂東太郎

利根川の稱。

坂東平野の主

たる河川の意。

成氏

古河公方足利

成氏。

ぬ君命重く彌高き、かの樓閣は三層なり。其の二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へ難き、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、饑熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の舟楫緒絶え、進退既に谷まりし、敵にしあれば争て我、繋ぎ留めんとむささびの、樹傳ふ如くさら〜と、登り果てたる三層の、屋根にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、睨まへ合うて立つたる有様、浮圖の上なる鸛の巢を、巨蛇の狙ふに似たりけり。

廣庭には、成氏朝臣、横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし、床几に尻を打掛けて、勝負如何にと見上げたり。芳流閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍長刀を晃かし、或は箭を負ひ弓杖突立て、組んで落ちなば繋ぎ留めんと、項をそらして之を觀る。加之外の方は、連綿として

墨氏 墨翟。周代の思想家。嘗て宋城を固守して楚軍を御した。
魯般 公輸般。墨子と同時の人。楚の謀臣となつて宋を攻めた。

膳臣巴提便 欽明天皇七年百濟に使した時、虎穴に刺殺した人。
富田三郎 和田義盛の士。源實朝の面前で長さ二尺七寸の大鹿角二つた。一度に折

杳かなる、河水、遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、能く見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なれば、地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも、羅に入りぬ、獸ならずも、狩場に在り。三寸息絶ゆれば、絳皆休まん。脱れ果てじと見えたりけり。

其の時信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等を、斫落しつる後は、絶えて近づく者なきに、今只一人登り來ぬるは、よに覺ある力士ならん。しやつは是膳臣巴提便が、虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫一人の敵なり、引組んで刺違へ、死するに難きことやある。好き敵ござんなれ、目に物見せん。」と、血刀を袴の稜もて押拭ひ、高瀬の如き方桴に、立つたるまゝに寄するを俟てば、見八も亦思ふやう、彼の犬塚が武藝、勇悍素より萬夫不當の敵なり。さりとても、搦め兼ねて、他の援を借ることあ

らば、獄舎の中より此の役義に、擇み出されし甲斐も無し。搦め捕るとも撃たるとも、勝負を一時に決せんものを。」と思ひにければ、ちつとも擬議せず、「御諛さふ。」と呼掛けて、拿つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の、左の方より進み登りて、組まんとすれど、寄せ付けず、「心得たり。」と、鋭き太刀風に、撃つをはつしと受留めて、拂へば透さず、切込む刀尖、支へて流す一上一下、迂る蕘を踏留めて、頻りに進む捕手の秘術、あなたも劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負も判かざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざる者なく、瞬もせず氣を籠めて、見るめもいと遙かなり。

さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば、勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音掛聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風起り、二龍青潭に戦ふ時、沛然として雲起るも、斯くぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹かと



芳流閣の上の格闘

見る許りなる、いと高き閣の棟の上に、死を争ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖肱、當の外れを、裏かくまでに切れかれしかど、太刀を抜かず、信乃は刀の刃も續かて、初に淺痕を負ひしより、次第に疼みを覺ゆれども、足場を守りて、撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を、見八右手に受流して、返す拳に附入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みて、磔と打つ、十手を丁と受留むる、信乃が又は鏢際より、折れて遙かに飛失せつ。見八得たりと組むを、そが儘左手に引付けて、互に利腕しかと取り、振倒さんと曳聲合せて、揉みつ揉まるゝ力足、此彼

齊しく踏込らして、河邊の方へころくと、身を輾ばせし覆車の米苞、坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる臺の勢、止まるべくもあらざめれど、互に拿つたる掌を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、打累なりつゝ、どうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張切りて、射る矢の如き早河の、直中へ吐出されつ。而も追風と退く潮に、誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。〔南總里見八犬傳〕

一六 作者の心境

芥川龍之介

一

華山が歸つた後で、馬琴はまだ残つてゐる興奮を力に、八犬傳の稿をつゞけようと、何時ものやうに机に向つた。先を書きつゞける前

芥川龍之介
小説家。東京市の人。昭和二年歿、年三十六。
華山
畫。渡邊氏。天保十二年歿。八犬傳
馬琴の傑作小説。

に、昨日書いた所を一通り讀返すのが、彼の昔からの習慣である。そこで彼は、今日も細い行の間へ、べた一面に朱を入れた何枚かの原稿を氣をつけてゆつくり讀返した。



瀧澤馬琴

すると、何故か書いてあることが、自分の心持とびつたり來ない。字と字との間に不純な雜音が潜んでゐて、それが全體の調和を到る所で破つてゐる。最初彼は、それを自分の癩が昂ぶつてゐるからだと解釋した。

「今のおれの心持が悪いのだ。書いてある事は、どうにか書切れる所まで書切つてゐるはずだから。」さう思つて、彼はもう一度讀返した。が、調子の狂つてゐる事は前と一向變りはない。彼は老人とは思はれない程、心の中で狼狽し出した。

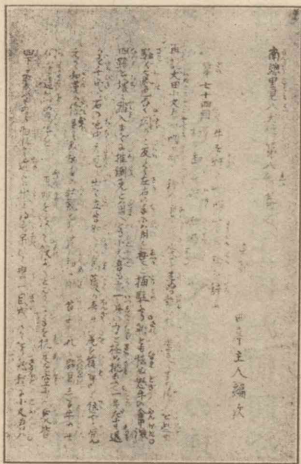
「このもう一つ前はどうかだらう。」彼はその前に書いた所へ目を通した。すると、これも亦徒に粗雑な文句ばかりが雜然としてちらかつてゐる。彼は更にその前を讀んだ。さうして又その前の前を讀んだ。

しかし讀むに従つて、拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に目の前に展開して來る。そこには何等の映像をも與へない敘景があつた。何等の感激をも含まない咏嘆があつた。さうして又何等の理路をたどらない論辯があつた。彼が數日を費して書上げた何回分かの原稿は、今の彼の目から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に心を刺されるやうな苦痛を感じた。

「これは始から、書直すより外はない。」彼は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向うへつきやると、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、目は机の上を離れない。彼

弓張月
馬琴の小説。
格説弓張月。
南柯夢
馬琴の小説。
三七全傳南柯
夢。

はこの机の上で、弓張月を書き、南柯夢を書き、さうして今は八犬傳を書いてゐる。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎮、墓の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、さういふ一切の文房具は、皆彼の創作の苦しみに久しい以前から親しんでゐる。それらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな——彼自身の實力が根本的に怪しいやうな、忌はしい不安を禁ずることが出来ない。



稿草傳犬八見里

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりであつたが、それもやはり、事によると人並に己惚の一つだつたかも知れない。」

かういふ不安は、彼の上に、何よりも堪へ難い、落莫たる孤獨の情を齎した。

彼は、彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけに又同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に飽くまでも不遜である。さうして、更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことは、どうして安々と認められよう。しかも彼の強大な「我は、悟り」と「諦め」とに避難するには餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難船した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひつゝ、けた。もしこの時、彼の後の襖が、けたゝましくあけ放されなかつたら、さうして「お祖父様只今。」といふ聲と共に、柔かい小さな手が彼の頸へ抱きつかなくなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に何時ま

でも鎖されてゐたことであらう。が、孫の太郎は襖をあけるや否や子供のみが持つて居る大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よく飛びあがつた。

「お祖父様只今。」

「お、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に、八犬傳の著者の皺だらけな顔には、別人のやうな悦が輝いた。

二

茶の間の方には、痛高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が賑やかに聞える。時々太い男の聲のまじるのは、折から悴の宗伯も歸り合せたらしい。太郎は祖父の膝に跨りながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣にさらされた顔が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが、息をするた

びに動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋附を着た太郎は、突然かう言ひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、靨が何度も消えたり出來たりする。それが馬琴には、自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日。」

「御勉強なさい。」

馬琴はとう／＼噴き出した。が、笑の中ですぐ又語をつぎながら、

「それから。」

「それから——え、と——癩癩を起しちやいけませんつて。」

「おや／＼それつきりかい。」

「まだあるの。」

太郎はかう言つて、絲鬢奴の頭を仰向けながら、自分も亦笑ひ出した。眼を細くして、白い齒を出して、小さな齧をよせて、笑つてゐるのを見ると、それが大きくなつて、世間の人のやうな憐むべき顔にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、そんなことを考へた。さうしてそれが、更に又彼の心を揅つた。

「まだ何かあるかい。」

「まだね、いろんな事があるの。」

「どんな事が。」

「えゝと——お祖父様はね、今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりますから。」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつとく、ようく辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事を言つたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。」

「さうさな。今日は御佛參に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顔を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「浅草の観音様がさう言つたの。」

かう言ふと共に、この子供は、家内中に聞えさうな聲で嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛びのいた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに、小さな手を叩きながら、ころげるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に嚴肅な何物かが刹那に閃いたのはこの時である。彼の脣には幸福な微笑が浮かんだ。それと共に、彼の目には何時か涙が一ぱいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ所ではない。この時、この孫の口から、かういふ語を聞いたのは、不思議なのである。

「觀音様がさう言つたか。勉強しろ。癩癩を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供の様に頷いた。

三

その夜の事である。

馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は、家内のものもこの書齋へはひつて來ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲と共に寂しく夜長の寂しさを語つてゐる。

初め筆を下した時、彼の頭の中には、かすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と筆の進むに従つて、その光のやうなものは、次第に大きさを増して來る。經驗上、その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意をして筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起すことを知らなければ、一度燃えても直ぐに又消えてしまふ。

「あせるな。さうして出來るだけ深く考へろ。」馬琴は、やゝもすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分に囁いた。が、頭の中

には、もうさつきの星を砕いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうしてそれが刻々に力を加へて来て、否應なしに彼を押しやつてしまふ。

彼の耳には、何時か蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の目にも、圓行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一氣に紙の上をすべりはじめた。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書きつゝけた。

頭の中の流は、丁度空を走る銀河のやうに滾々として何處からか溢れて来る。彼はその凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力が萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして、堅く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。

「根かぎり書きつゝけろ。今おれが書いてゐる事は、今でなければ書けない事かも知れないぞ。」

しかし光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。却つて目まぐるしい飛躍の中に、あらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つて来る。彼は遂に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

その時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を拂つて消えてしまつた。あるのは、たゞ不思議な悦である。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作者の嚴かな魂が理解されよう。こゝにこそ、人生はあらゆるその残滓を洗つて、まるで新しい鑽石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか。

「傀儡師」

一七 奥の細道

松尾芭蕉

松尾芭蕉

俳人。名は宗房。伊賀國の人。元祿七年歿、年五十一。

月日は

天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客。
(李白、春夜宴桃李園序)

去年

元祿元年。

白河の關

磐城國白河郡。

杉風

芭蕉の門人。

鯉屋藤左衛門。

別墅

深川六間堀にあつた。

一首 途

月日は百代の過客にして、往きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯を泛かべ、馬の口捉へて老を迎ふるものは、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風に誘はれて、漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゝろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず。股引の破れを綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移る。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

上野・谷中
今の東京市下谷區。
千住
武藏國。江戸の東北。

草加
武藏國。奥州街道に當る。

彌生も末の七日、曙の空おぼろ／＼として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峯かすかに見えて、上野谷中の花の梢、またいつかはと心細し。陸しき限りは宵よりつどひて、船に乗りて送る。千住といふ處にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の泪を注ぐ。

行く春や鳥は啼き魚の眼は涙

これを矢立の始として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚たゞかりそめに思ひ立ち、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと定めなきたのみの末をかけ、その日漸く草加といふ宿に辿り着きにけり。瘦骨の肩にかかれるものまづ苦しむ。たゞ身すがらにと出立ち侍るを、紙衣一重は夜の防ぎ、浴衣雨具、墨筆のたぐひ、あるはさりがたき驢などしたる

いかで都へ
 いたよりあらば
 いかで都へ告
 げやらん今日
 白河の關はこ
 えぬと平兼
 盛
 秋風を
 都をば霞と共
 に立ちしかど
 秋風ぞ吹く白
 河の關。能因
 法師
 紅葉を
 都にはまだ青
 葉にて見しか
 ども紅葉ちり
 しく白河の關
 (源頼政)
 卯の花の
 見で過ぐる人
 しなげれば卯
 垣根や白河の
 關。藤原季通
 清輔
 藤原氏。二條
 天皇の御代の
 人。
 會良
 河合惣五郎、
 芭蕉の門人。
 等躬
 相良氏。芭蕉
 の門人。須賀
 川の驛長。

は、さすがに打捨てがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

二 白河の關

心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。
 いかで都へと便り求めしもことわりなり。中にもこの關は風騒の
 人こゝろを留む。秋風を耳に残し、紅葉を佛にして、青葉の梢なほ哀
 れなり。卯の花の白妙に茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞ
 する。古人冠を正し、衣裳を改めしことなど、清輔の筆にも留めおか
 れしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな

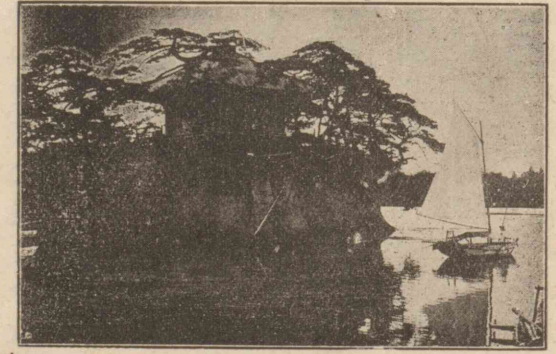
會良

とかくして越えゆくまゝに、阿武隈川を渡る。須賀川の驛に等躬
 といふ者を尋ねて、四五日とゞめらる。まづ白河の關いかに越えつ
 るやと問ふ。長途の苦み身心疲れ、且は風景に魂うばはれ、懷舊に腸
 を斷ちて、はかばかしく思ひめぐらさず。

風流のはじめや奥の田植歌

三 松島

そもく事ふりにたれど、松島は扶桑
 第一の好風にして、およそ洞庭、西湖に恥
 ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、
 浙江の潮をたふ。島々の數を盡くし
 て、欵つものは天を指し、伏すものは波に
 匍匐ふ。あるは二重に重なり三重に疊
 みて、左に別れ右につらなる。負へるあ
 り、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松
 の緑濃かに、枝葉潮風に吹きたわみて、屈
 曲おのづから撓めたるが如し。千早ぶる神の昔、大山祇のなせる業
 にや。造化の天工、いづれの人か、筆を揮ひ辭を盡くさん。



松島

雄島が磯の松の木蔭に、世を厭ふ人もまれく見え侍りて、落穂松笠など打煙りたる草の庵しづかに住みなし、如何なる人とも知られずながら、先づ懐かしく立寄るほど、月海に映りて、晝の眺また改まる。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階をつくりて、風雲の中に旅寝するこそあやしきまで妙なる心地はせらるれ。

會 良

余は口をとちて眠らんとしていねられず。舊庵を別る、時、素堂松島の詩あり。原安適、松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きて今宵の友とす。

四 平 泉

十二日、平泉へと志し、あねはの松、緒だえの橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ道、そことも分かず、終に道踏みたがへて石巻といふ湊に出づ。「黄金花咲く」と詠みて奉りし金華山、海上に見わ

素堂 山口氏。甲斐の人。享保二年歿。
原安適 醫者。芭蕉の友人。
平泉 陸中國。
石巻 陸前國。
黄金花咲く すめろぎの御代祭えむとあづまなるみちのくやまにこがれ花咲く。(萬葉集)

袖の渡 陸前國桃生郡橋浦村にあるといふ。
尾駁の牧 不詳。

眞野の萱原 陸前國牡鹿郡眞野。

長沼

陸前國登米郡新田村、東南一名新田沼。

戸伊摩

同郡登米町。

三代

藤原清衡・基衡・秀衡。

秀衡が跡

即ち平泉館址。

金雞山

秀衡が富士山に擬して造つたもの。

高館

衣川館。義經の居住した地。

泉が城

元泉三郎忠衡の居城。



たし、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、竈の煙立ちつゞきたり。思ひかけずかゝる處にも來れるかなと、宿借らんとすれど、更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜を明かして、明くればまた知らぬ道迷ひ行く。袖の渡、尾駁の牧、眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。その間二十餘里程とおぼゆ。

三代の榮耀一炊の中に、して、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を残す。まづ高館に登れば、北上川南部より流る、大河なり。衣川は泉が城をめぐりて、高館の下にて

國破れて

國破山河在、
城春草木深。
感時花濺淚、
恨別鳥驚心。
烽火連三月、
家書抵萬金。
白頭搔更短、
渾欲不勝簪。
(杜甫)

經堂

清衡の建立した
もの。

光堂

一名金色堂。

大河に落ちいる。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口を差固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時の移るまで泪を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂

は三將の像を遺し、光堂は三代の棺を納め、

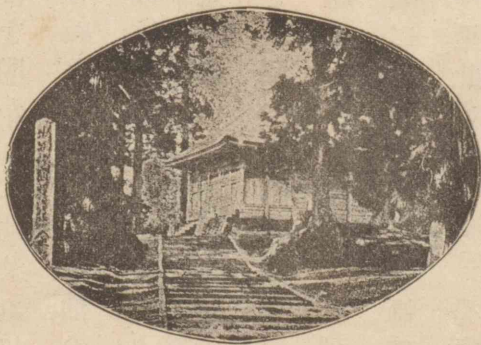
三尊の佛を安置す。七寶散失せて、珠の扉

風に破れ、黄金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢

空虚の叢となるべきを、四面新に圍ひ、藁を覆うて風雨を凌ぎ、姑く千

歳の記念となれり。

五月雨の降りのこしてや光堂 〔奥の細道〕



平泉金色堂

一八 元祿俳句選

山路来て何やらゆかしすみれ草

何事ぞ花見る人の長刀

草臥れて宿かる頃や藤の花

子や待たんあまり雲雀の高上り



丈草筆蹟

我が事と鱒の逃げし根芹かな

目に青葉山郭公初松魚

渡りかけて藻の花のぞく流かな

似合はしき芥子の一重や須磨の里

芭蕉 去來 芭蕉 風
芭蕉 來蕉 風

丈草 素堂 凡兆 柱國

芭蕉 松尾氏。伊賀の人。元祿七年歿。
去來 向井氏。長崎の人。寶永元年歿。
杉風 杉山氏。江戸の人。享保十七年歿。
丈草 内藤氏。尾張の人。寶永元年歿。
素堂 山口氏。甲斐の人。享保元年歿。
凡兆 氏名。歿年不詳。芭蕉の門人。金澤の人。
柱國 壺井氏。尾張の人。元祿三年歿。

支考
各務氏。美濃
の。人。享保十
六年歿。

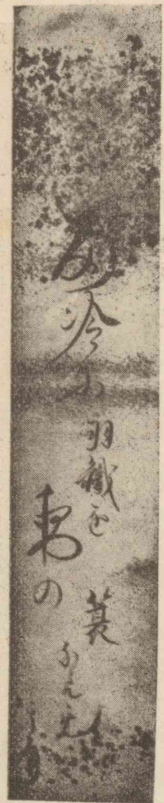
北枝
立花氏。金澤
の。人。享保三
年歿。

會良
河合氏。信濃
の。人。寶永六
年歿。

嵐雪
服部氏。淡路
の。人。寶永四
年歿。

許六
森川氏。彦根
の。人。正徳五
年歿。

白雲や垣根を渡る百合の花
湖の水まさりけりさつき雨



蹟筆角其

草の葉におくや残暑の土埃
行きくゞて倒れ伏すとも萩の原
黄菊白菊その外の名はなくもがな



蹟筆雪嵐

十團子も小粒になりぬ秋の風
枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

芭許
蕉六

北枝
會良
嵐雪

尙白
江左氏。大津
の。人。享保七
年歿。

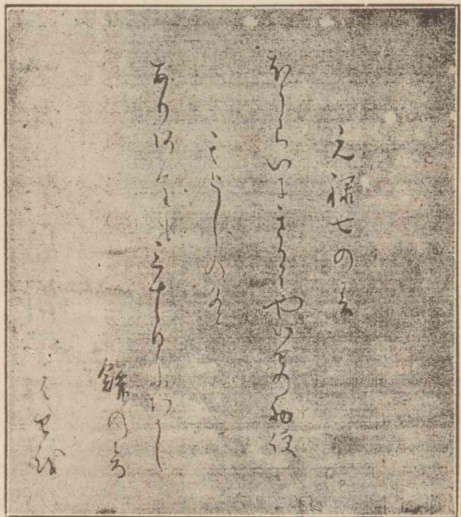
越人
佐分利氏。熊
本の。人。元祿
十五年歿。

野坡
志太氏。越前
の。人。元文五
年歿。

荷兮
山本氏。名古
屋の。人。享保
元年歿。

其角
榎本又寶井氏。
江戸の。人。寶
永四年歿。

上行くと下来る雲や秋の空
藁積んで廣く淋しき枯野かな



蹟筆蕉芭

長々と川一すぢや雪の原
あれ聞けと時雨来る夜の鐘の聲

凡 尙 越 人
凡 白 人
凡 兆
野 坡
人聲の
煤けぞ寒き雪の暮
夜半を過ぐる寒さ哉
荷兮
木枯に
二日の月の吹散るか
其 凡 其
角 兆 角

金屏の松の古びや冬ごもり
蹲る藥の下の寒さかな

芭蕉
丈草

矢島楫子

女流教育家、

社會事業家。

大正十二年歿、

年九十一。

三宅やす子

小説家。故理

學博士三宅恒

方未亡人。明

治二十三年京

都市生。

守屋女史

名は東。初楫

子の従ひ。そ

の歿後も續い

て矯風運動に

従事してゐる。

明治十七年東

京市生。

一九 矢島楫子刀自の印象

三宅やす子

世界平和のために、老齡九十の身を米國に運んで、大統領に熱誠を披瀝された矢島楫子刀自については、もつと多くの感謝を一般の女性を持たなければならぬ筈である。それは刀自歸朝後、隨伴せられた守屋女史から、彼の地での状況の一斑を聞くに及んで、切實に感じた事だつた。

學窓を離れると讀書にさへ遠ざかつて、進歩の途を我から絶つ非活動的な女性の多い我が國にあつて、年齢から云つても、今迄の功績から云つても、もう靜養されて十分である矢島刀自が、なほ海を越えてはる／＼社會のために勞苦を盡くされた事を思ふと感歎に餘る。

矯風會
基督敎婦人矯
風會。



矢島楫子

そして此の老齡者に安閑とまかせて置いて、若い人々は何をして居るのかと、私の心に云ひやうもない感激の涙を湧かせた。越えて、矢島刀自重態の事が傳へられ、一時は全く絶望といふ事であつたが、奇蹟的に恢復して、看護の人の愁眉を開かせた。

大正十二年九月赤坂田町の矯風會の建物が焼けてからは、大久保百人町の婦人ホームに避難して居られた。私がふと刀自の風貌に親しく接する機會を得たのは、そのホームで催された或會合の時であつた。

婦人ホームの二階の一室は、靴を脱いで上るやうになつて居た。私は氣づいて靴を脱がうとすると、守屋さんが、

「先生今日だけ靴のまゝで入つてようございますか。」

と、あの快活な方が、それは優しい、涙ぐましい親しさで刀自に言は

れると、

「あゝ可いとも。」

と、病床の刀自は私の想像したのとは全く異つた非常に張のある朗かな聲で答へられた。

でも私は其の時もう上靴に穿きかへて居た。丁度新聞社の人達が寫眞を寫しに來て居た時である。

「マグネシウムをたいたら御いやでせうね。」

「びつくりなさるでせう。」

そんな事を側の人達は案じて居られた。で、守屋さんが、

「先生、一寸マグネシウムをたいて構ひませんか。」

多分厭だとおつしやるだらうと案じて訊かれた返事は、

「可いとも。そんな事位。」

元氣であつた。そして全く天真といふ言葉で表すのが、一層適當

なやうな感じをさせないではおかない或力をもつて居られた。

寢衣の上に重ねた毛絲の温かさうなジャケツを搔合せて衣紋をつくろひ、顔を撫でたりして居られるのは、寫眞をうつすといふ事についての心構らしかつた。(視力は全くなくなつて居られるとの事だつた。)

私は其の元氣が、何とも云はれず嬉しかつた。

皇后陛下から賜はつたといふお人形と毛布とが飾られて、快くレズに入つた刀自の寫眞は平和そのものである。

挨拶をするとき、お目が見えないから。」と注意されて、私は握手によつておちかづきになつた。私はそのしつかりとした温かい手に通ふ無限の熱誠、日本の女性に稀有な性格のもつ勇氣、それを感じないでは居られなかつた。

私は何故といふ事なしに、其の室の中で涙がぢつと目にたまつて

皇后陛下
今の皇太后陛下

仕方がなかつた。

虚偽と虚飾と、臆病と迎合と、遲疑と退屈と、あらゆるヴェールに包まれて棲息しなければならぬかの様な憐むべき女性の因襲から、數十年前に既に全く離れて、否、生れながらにして其の特異の性格を有つて、己の信じる處にまつしぐらに進んだ此の老刀自の感化が、どれだけの大きな力となつて居るだらうか。世間の毀譽には全く頓着なしに、一に我が國の婦人界は如何に恩恵を蒙つたか。我が社會の諸の陋習に對しての一大抗議革新の運動が、如何に渾身の勇氣をもつてなされたか。其の仕事が唯内國的存在に止らず、廣く世界的であり、普遍的である事は、まことに謂はれない事ではないのである。私は其の日家に歸つても、唯握手をかはしただけの刀自の印象と、其の感激とが、私の身内にあまりに鮮かに強い事を驚いた。

革新の運動
禁酒・純潔平
和の三つを其
のモットーと
する。

「こんな事はなかつた。本當にこんな經驗は今まで私の逢つた婦人にはなかつた。殊に老齡の方からあの感激を受けたといふことは。」

私はいろいろに考へさせられた。

矢島楫子刀自は熊本の人、同胞八人、男一人女七人の中の第七子に生れた。竹崎順子も、蘇峰、蘆花氏の母堂も、横井小楠夫人も、みな刀自の姉であつた。

明治五年に三十を過ぎて、初めて熊本から東上して、小學教師となり、その後ミセスツルに依つて信仰の生活に入り、活動の新生活が始まつた。そして矯風會の事業は最も主なもので、老境に入つてから三回まで洋行された。

世界に對する代表的の婦人である。そしてそれは、何の學校を出たといふのでもなく、學識もなく、たゞ家風によつて教育されて今日

竹崎順子
熊本縣の女流
教育家。明治
三十八年歿、
年八十一。
蘇峰氏の母堂
名は久子。大
正八年歿、年
九十一。
小楠夫人
名はつせ子。
明治二十七年
歿、年六十四。
ミセスツル
明治初年來朝
した米國の婦
人宣教師。

に至つたのであります。」と刀自身の言はれる通り、全く家風から得た自信の力である。「私達の問題」

高山樗牛

文藝批評家。

文學博士。名

は林次郎。山

形縣の人。明

治三十五年歿、

年三十二。

二〇 死と永生

高山樗牛

死は生きとし生ける者の免るべからざる運命なり。夫唯免るべからざる運命なり、故に又避くべからざる問題なり。されど、生を惜しむ人はあれども、死を惜しむ人は少く、生について慮る人はあれども、死について考ふる人は稀なり。訝しからずや。

如何にして生くべきか。これ人生の大いなる疑問なり。然れども、如何にして死すべきかは、更に大いなる疑問にはあらざるか。我等は歴史を讀みて大いなる宗教の起るを見たり。されど、宗教とは生きんがための教にあらざして、死せんがための悟なり。釋迦は人生の四苦に感じて解脱の途を説きぬ。耶蘇は同胞の宿罪を贖うて

永生の道を開きぬ。解脱や、永生や、死を外にして何等の意義がある。最も賢き人の説ける哲學の旨趣も亦これに外ならざるなり。天地人生の理法を明らかにするは、人をして安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とは、所詮死を安からしむるの謂にあらずや。道德は現世のため、のみ存するものにあらず、名譽の不朽を思ひ、事業の永遠をいはば、これ即ち死後の世界をいふなり。あはれ、その生を見てその死を見ざる者は、人生の根本を遺れたるなり。死はすべての物の終にして、又すべての物の始なればなり。されば、人々死を考へよ。死を考ふるは即ち人生の目的を考ふるなり、死滅を考ふるにあらずして永生を考ふるなり。か



石墓と牛樗山高

の死生の優劣を争ひ、人生の價値を疑ふものは愚なるかな。我等は生を知る、未だ死を知らず。如何ぞその優劣を知らんや。人生の價値は絶對なり、他に比すべきものなし。厭世といひ樂天といふ、我等その何の意なるを知らず。我等は唯人生の實在せるを知るのみ。されば、我等は生きざるべからず、永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり。されど、我等は死を超絶してその永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得んか、人生究竟の問題ここに集る。

世に神に禱りて永生を求むるものあり。佛に願ふものは人生の倏忽を歎きて、涅槃の寂寞を求む。されど、形體を離れて魂魄なきを如何にすべき。その墳墓を壯大にし、金を鏤め石に刻して、名の後世に傳はらんことを求むるものあり。されど、時は凡ての物の破壊者なり。風雨幾歲、時移り、人渝り、滄桑幾度か變轉して、墓標獨り全きを

得べしや否や。かくの如きは永生の道にあらざるなり。

まことの永生は、名によりて生くるにあらずして、事によりて生くるなり。儒教の存せるところ、今なほ孔子あらざるはなく、佛寺の建てるどころ、到る處に釋迦あり。耶蘇は十字架にかゝれりと雖も、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激する者の胸には、楠公その人の生命あり。蒸氣機關の動くところには、ワットの血液あり。電氣の線のかゝるところは、即ちフランクリンが永生の地にあらざるや。

まことの永生は、時と共に深さを加へ、人と共に廣さを加ふ。されば、一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々泪々として遂に世界を動かさずんば已まざるべし。十九世紀の文明はかくの如き幾多永生の結果に外ならざるなり。我が少壯の諸子よ。諸子は嘗て死を考へしことありや。その年の弱きを以て早しとするなかれ、死を思はずして生くるは、空しく生

ワット
英國の機械學者、一七六三—一八一九年。
フランクリン
米國の政治家、學者、一七〇六—一七九〇年。

くるなり。その死をして遺憾なからしめんと欲せずして、獨りその生の完からんを望むは、これ目的なくして道を歩むなり。死を思ふは即ち永生を思ふなり。而して最もよくこの問題を解釋したるものは哲人傑士なり。『樗牛全集』

二一 岳の日没

富田碎花

富田碎花
詩人。名は戒治郎。明治二十三年盛岡市生。

やまなみの、つらなりの、
かなた遠く果つる陽の
映をこそ受けたれば、
仰ぐこゝの岳の
峻銳の岩壁の
色のさてもゆゝしさよ。
その搖ぎを見せぬ灼鐵の肌はだに

この世のものならぬ
匂をぞ漲らせて、

しばし山の子を
物思ひに沈み潜ます。

噫

誰かかゝる一瞬を有ち得たるとき、

醜みにくき人生の相すがたを、

この境にまで

描き像る煩わづらひをなさんや。

冷たく燃え狂ふ夕陽のなか。

閃ひらき光るは岳樺たけかほより散る葉か、

否、

否、

高根の蝶のありとしもなき風に
舞へるなり、

二つ、三つ、また五つ……。

二二 古今と新古今

一 古今和歌集抄

紀貫之

袖ひぢて結びし水のこほれるを

春たつ今日の風やとくらん

凡河内躬恒

月夜にはそれとも見えぬ梅の花

香をたづねてぞ知るべかりける

在原業平

紀貫之
古今集撰者の一。

凡河内躬恒
古今集撰者の一。
在原業平
阿保親王の弟

フセン
フセ
レノイ
レノイ
レノイ
レノイ
レノイ
レノイ
レノイ
レノイ

凡河内躬恒
古今集撰者の一。
在原業平
阿保親王の弟

歌化

五子。行平の弟。

在原業平

紀友則

古今集撰者の一。

在原業平

伊勢

宇多天皇の頃

僧正遍昭

僧正遍昭

俗名良峰宗

貞。桓武天皇の皇孫。

藤原敏行
歌人。

世の中に絶えて櫻のなかりせば
春の心はのどけからまし

紀友則

久かたの光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらん

伊勢

さつき來ば啼きもふりなん杜鵑

まだしきほどの聲を聞かばや

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて

なにかは露を玉とあざむく

藤原敏行

秋來ぬと目にはさやかに見えねども

風のおとにぞおどろかれぬる

讀人不知

昨日こそ早苗とりしかいつの間に

稲葉そよぎて秋風の吹く

壬生忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ

鹿の鳴く音に目をさましつゝ

坂上是則

あさぼらけ有明の月と見るまでに

吉野の里にふれる白雪

讀人不知

雪ふりて年の暮れぬる時にこそ

遂にもみぢぬ松も見えけれ

壬生忠岑
古今集撰者の
一。

坂上是則
父祖不詳。從
五位下加賀介。

二 新古今和歌集抄

太上天皇

ほのくと春こそ空に來にけらし

天の香具山かすみたなびく

見渡せば山もとかすむ水無瀬川

ゆふべは秋と何おもひけん

式子内親王

山ふかみ春とも知らぬ松の戸に

たえくかゝる雪のたまみづ

宮内卿

うすくこき野邊の緑の若草に

あとまで見ゆる雪のむらぎえ

藤原良經

太上天皇
後鳥羽天皇の

式子内親王
後白河天皇の
皇女。

宮内卿
後鳥羽天皇の
宮女。

藤原良經
兼實の子。

攝政太政大臣。

うちしめりあやめぞかをる杜鵑三月
鳴くやさつきの雨のゆふ暮

人住まぬ不破の關屋のいたびさし
荒れにし後はたゞ秋の風

能因法師

山里の春のゆふぐれ来て見れば

いりあひの鐘に花ぞ散りける

藤原俊成

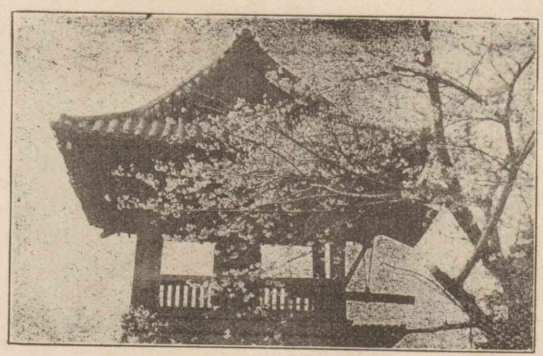
駒とめてなほ水かはん山吹の

花のつゆそふ井出の玉川

源頼政

庭のおもはまだ乾かぬに夕立の

空さりげなく澄める月かな



能因法師

俗名橋永ハシナガ、
諸兄十世の孫、
後鳥羽天皇の
頭の人。

藤原俊成

千載集の撰者。

源頼政

源三位。

西行法師

俗 佐藤義清。
建久元年寂、
年七十三。

鴨長明

遠江の人。建
保四年歿、年
六十三。

藤原定家

新古今集撰者
の一。

藤原家隆

新古今集撰者
の一。

西行法師

鴨長明

石川やせみの小川の清ければ

月も流をたづねてぞすむ

藤原定家

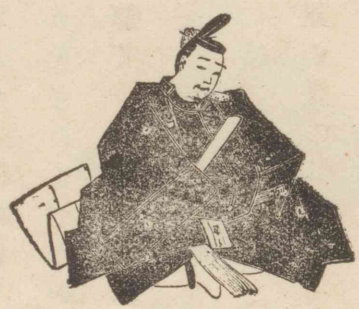
見渡せば花も紅葉もなかりけり

浦のとまやの秋の夕暮

藤原家隆

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より

こほりて出づるありあけの月



藤原定家

近松門左衛門
淨瑠璃作者、
號は巢林子、
又は平安堂、
長州萩の人、
享保九年没、
年七十二。

姫君
丹波の城主由
留木殿の御湯
殿の子調へし
らべの姫。

滋
滋の井。馬方
三吉の實母、
姫君の乳母、
大殿様
由留木殿。
お袋様
由留木の妻。

二三 滋の井

近松門左衛門

お傍の衆に囃されて、幼心の姫君、斯う面白い東とは、いま迄おれは知らなんだ。さあ〜往かう早往かう。滋「やあ御座らうとおつしやるか、そりやめでたいわ〜。又もや御意の變らぬ間に、行列揃へ。」と立騒ぐ。お乳の人は勇をなし、左様なら、ま一度大殿様お袋様とお盃。是も馬子殿お蔭ぢや、出来いた〜。其方には禮いふ、褒美やる、其處に待ちやや。」と、さゞめき渡り、奥に御供し入りにけり。馬方は遂に見ぬ金の間を、うろ〜と覗き廻れど、筵の外踏みもならはぬ備後表、三え、此の座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも此方の内がけつこで御座る。」と獨言して居たりけり。お乳の人は大高にお菓子さま〜ぶんかうに盛入れ、どれ〜三吉其處にか。まあ〜其方はけな者ぢや。道中雙六お目にかけて、それ故に姫君様

世
時
代

新
南
の
村
の
御
前
の
御
座
り
の
御
意
な
さ
る
。



近松門左衛門

お江戸へ御座ると御意なさる。お上にも御機嫌。これは御前の御菓子、ありがたういたゞきや。お錢三筋、買ひたい物買やや、ことに其方は通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋の井に逢はうといや。見れば見るほどよい子ぢやに、馬方させる親の身はよく〜てあらう。」と、いとねんごろの詞の末、三吉つくづく聞きすまし、由留木殿の御内、お乳の人の滋の井様とはお前か、そんなら己が母様。」と抱きつけば、滋「あ、こは慮外な、おのれが母様とは。馬方の子は持たぬ。」ともぎ放せば、むしやぶり付き、引きのくれば、縋り付き、三、なんの無い事申しませう。わしが親はお前の昔の連合ひ、此の御家中にて番頭伊達の與作、其の子は私、此方様の腹から出た與之介は、わしぢやわいの。父様は殿様のお氣に違うて、國

をお出なされたは三つの時でおろ覚え、杳掛の姥が咄には、母様も離別とやらで殿様に御奉公、此方を姥が養育し、父様に逢はせたらう思へども甲斐もない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人滋の井様と尋ねよ。」と懇ろに教へて、姥はおれが五つの年、久しう痰を煩うて、あげくに鳥羽の祭禮に往て、餅が咽につまつてつい死んでのけました。在所の衆がやしなうて、漸う馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公します。この守袋を見さしやんせ、何のうそを申しませう。お前の子に紛れはない。外に望は何もない。父様を尋ね出し、一日たりとも三人一所に居て下され。みごと杳も打ちます。此の草鞋も私が作った。晝は馬を追うて夜は杳打ち草



夫太義本竹

竹本義太夫
義太夫節の開
祖で近松の作
な語った。攝
津の人。正徳
四年歿、年六
十四。

父様
丹波興作。

鞋作り、父様母様養ひませう。父様と一つに居て下され、拜みまする母様。」と、取付き抱付き泣き居たり。お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我が子の與之介、守袋も覺え有り。飛付いて懷に抱き入れたく氣はせけども、あつあ大事の御奉公、養ひ君のお名の疵、詐つて叱らうか。いやかはいげにさうも成るまい。まあちよつと抱きたい。あゝどうせうと、百千色の憂き涙、雙つの目にはたまちかね、咽び沈んで居たりしが、いや／＼我が子ながらも賢しい者、詐つて誠とせず、母を心のきたない者と、さげしまるゝも情なし。譯を語つて合點させ、恥ぢしめて返さんものと、涙のごうて氣をしづめ、こゝへ來い與之介。」と、引寄せて兩手を取り、扱も大きうなりやつたの。迎も成人せうならば、侍らしう何故尋常にも育たぬぞ。顔の道具手足迄、母は斯うは産み付けぬ。美しい黒髪を此のやうに剃り下げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞ。」と、又さめ／＼と泣きけるが、これ物

を合點しや。腹から産んだは産んだれども、今では子でも母でもない。浅ましう成りさがつたを嫌うていふでは更々ない。こゝの譯をよう聞きやや。かゝはもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓段々に奏者役番頭、千三百石迄お取立て、追腹程の御恩の家、其の間に其方を設け、上には姫様御誕生、御内證のよしみにて、かゝが乳を上げまし、首尾さへよければ、其方も今家老衆の子同然に二番と下座に下らぬ人。情なや父様が江戸詰の大事の所を仕損ひ、又切腹に極まつた。なれども腹を切らせては女房お家に置かれぬすぢ。大事のお姫様の乳離れ、御病氣も出ればいかゞとて、母を其のまゝ残さうため、父様の命助かり、奉公構ひの御改易。其の時母も一所に退けば尤も夫婦の道はたつ。されどもお姫様の乳離れ、お苦しみをかけましては、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜんぞ。残つて御恩を報じてくれと父様のことわりゆゑ、第一は男のため、夫婦の義理を忠義に

かへて、あかぬ離別をしたわいの。男の子は幼うても御勘氣の末氣遣ひな。與作が子とばし言やんなや。さあ早う御門へ出や。あゝいかなる因果な生れ性、現在我が子に馬追させ、男の行方も知らぬ身が、かゝる衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つたとて、これが何になる事。」と、聲を忍びに泣く計り。子は生れつき賢くて、聞分け有る程猶泣入り、三、悲しい咄を聞きました。さりながら常に姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟の事なれば、母様にさへ逢うたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし。」といへばちやつと口を押へ、滋あゝ、勿體ない、其の乳兄弟いはぬ事。姫君様は關東へ養子嫁子にお下り、高いも低いも姫御前は大事のもの、先は他人の世間體、三吉といふ馬追が乳兄弟に有るなど、どう妨げにならうやら。蟻の穴から堤も崩れる。軽いやうで重い事。ひそく、いうて人も聞く。先づ早う出てくれ。」と泣くゝいへば三吉、あゝ

母様、あんまり遠慮過ぎました。先づいうて見て下され。」滋「まだいひ居るか聞分けな。夫の事我が子の事。母に如才が有るものか。合點の悪い聞分けな。」と制する内に奥よりも、お乳の人はどこにぞ、御前から召します。」と呼ば、れば滋「あれ聞きや、人が来る。出たも。」と手を取つて引き出す。不便や三吉しく、涙、頬冠して目を隠し、沓見まつて腰に付け、見すほらしげな後影。滋「こりや、一度こちらむきや、山川で怪我しやんな。雨風、雪ふり、夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで、煩はぬやうにしてたも。毒な物喰はずに腹や麻疹の用心しや。可愛のなりやいたくしや。千三百石の代取が何の罰ぞ咎ぞ。」と、式代の段ばこに身を投げ伏して歎きしが、懐中の有合ひ一步十三服紗につゝみ、是たしなみに持つて居や。」と、涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めしげに、母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ。其の一步もいら

三重
淨瑠璃の三味
線の手の名。

ぬ。馬方こそすれ伊達の與作が惣領ぢや。母様でもない他人に金貫はう筈がない。え、胴慾な母様、覺えて居さつしやれ。」と、わつと泣き出す其の有様、母は魂消え入りて、養ひ君お家の御恩思はずば、さて一人子を手放してなんの遣らうぞ。奉公の身の淺ましや。」と、悶え焦れて歎きけり。時に奥口さゝめいて「早御立ち。」と、姫君の御輿昇きあげ行列立て、お乳の人の乗物をひら付けにこそ昇き寄せけれ。お乳はさあらぬ顔つきして、姫君の御伽に最前の馬方を此の乗物に引付け、お慰みに諺はしや。「畏つた。」と、宰領ども「こりや、其處なじねんじよめ、謠ひ居らう。」ときこつなく、やあ此奴はほえをるか。何ぢやこりや忌々し。」と、握拳を二つ三つ、頂きながら泣き聲に「三坂はてるく、鈴鹿は曇る、土山あひの、あひの土山雨がふる。」ふる雨よりも親子の涙、中にしぐるゝ、三重「雨やどり。」丹波與作「

石井柏亭

洋畫家。名は満吉。明治十五年東京市生。

二四 洋畫の觀方

石井柏亭

素人は油畫を遠くから見るのがいゝと言ひます。かと云つて、無暗に遠くへ行つたのでは、畫は本當に見えません。矢張大凡一定した距離があります。それは畫の性質に従つて多少違ひますが、先づ畫面の對角線の三倍位離れるのが普通となつて居ます。離れて大局を觀、近づいて細部を觀る、此の二つの觀方を通して畫の美醜を識別します。

素人が一定の距離を越えて遠望したがるのは、實物の眞に迫るのを洋畫の重大條件として居るからでもありませんが、實物の眞に迫るといふことは、日本畫に重大條件でないやうに、洋畫にとつてもそれ程の重大條件ではありません。西洋でも嘗てはそれを重要視したこともありましたが、今日ではさういふことも薄らぎました。で

つく芋山水
南畫の形を素
人目に惡評し
た言葉。

すから、彼の南畫の所謂「つく芋山水」を指して、實物に似る似ないを云云しないならば、眞に迫らぬ洋畫に對しても、實物に似る似ないを兎や角言ふに及びません。私共は日本畫に對すると同じ氣持で洋畫をも鑑賞されることを、一般の人に望みます。

それでは眞に迫つた洋畫は凡てくだらないものかと言ふに、それは必ずしも然うではありません。同じ眞に迫つたものでも、藝術家の全力的な熱心を以て仕遂げられたのと、單に素人の歡心を買ふべく、機械的に工藝的に仕遂げられたのとでは、格段の相違があります。ヤン・ファン・エイクの畫いた有名な「アルノルフィニと其の妻」といふ畫などは、天井から垂れ下つた燭臺や、壁に懸かつた圓鏡のすべてに、精細な描寫が行届いて居て、眞に迫つた畫の方ですが、實に立派なものです。精寫そのものに熱情が見えるばかりでなく、此の畫の如きは他に重要な畫的要素を具備して居ます。

ヤン・ファン・
エイク
第十五世紀フ
ランドルの天
才畫家。
アルノルフィ
ニと其の妻
ロンドン國民
畫廊にある。

畫的要素といふのは、つまり線とか形とか色とか構圖とかいふ純粹に畫を構成する所の各要素を言ふのです。是が缺けて居ては畫になりません。何處の景色を畫いたもので、それがどの程度に眞に迫つて居るか、又どういふ人物を寫して、其の風貌が如何に能く傳へられて居るかといふやうな問題は、其の次に來るべきものです。畫として最も大切なことは、圖の仕切り方、即ち構圖、それから線と形と色との配合でなければなりません。畫家の思想は、凡て線と形と色とを通して觀者に訴へられるのですから、觀者の方でも、畫の中に文學的意味や哲學や宗教などを求めようとするのは間違です。純粹に畫の領域に屬するものを享受するのが本當です。前のファン・エイクの「アルノルフィニ」の肖像にも、是等の畫的要素が具備して居るから、觀者に美感を與へるのです。畫題が乞食であらうと天女であらうと、それは畫の價値に何の關係も無いことは言ふまでもありません。

ムリリヨ
一六二七—
六八二年。
ルーヴル宮
パリ市にある
古の王宮。現
時は博物館。

ヴェラスケス
一五九九—
六六〇年。

ホイスラー
英國の印象派
畫家。一八三
四年—一九〇三
年。
マナー
佛國印象派の
首唱者。一八
三三—一八八
三年。
ミレー
田園畫家。一
八一四—一八
七五年。

せん。スペインのムリリヨは基督教畫題即ち聖母などを屢畫くと同時に、又幾枚かの乞食の畫を遺しました。私共は畫家の立場から却つて其の乞食類の方に賛成します。特にパリのルーヴル宮にある一枚は、畫として優れてゐると思ひます。スペインではムリリヨよりもヴェラスケスが尙一層純粹の畫家として大を成して居て、近代諸家の畫に非常な影響を與へました。近代諸家をして、畫の本領に目覺め



(作ヨリリム) 乞食

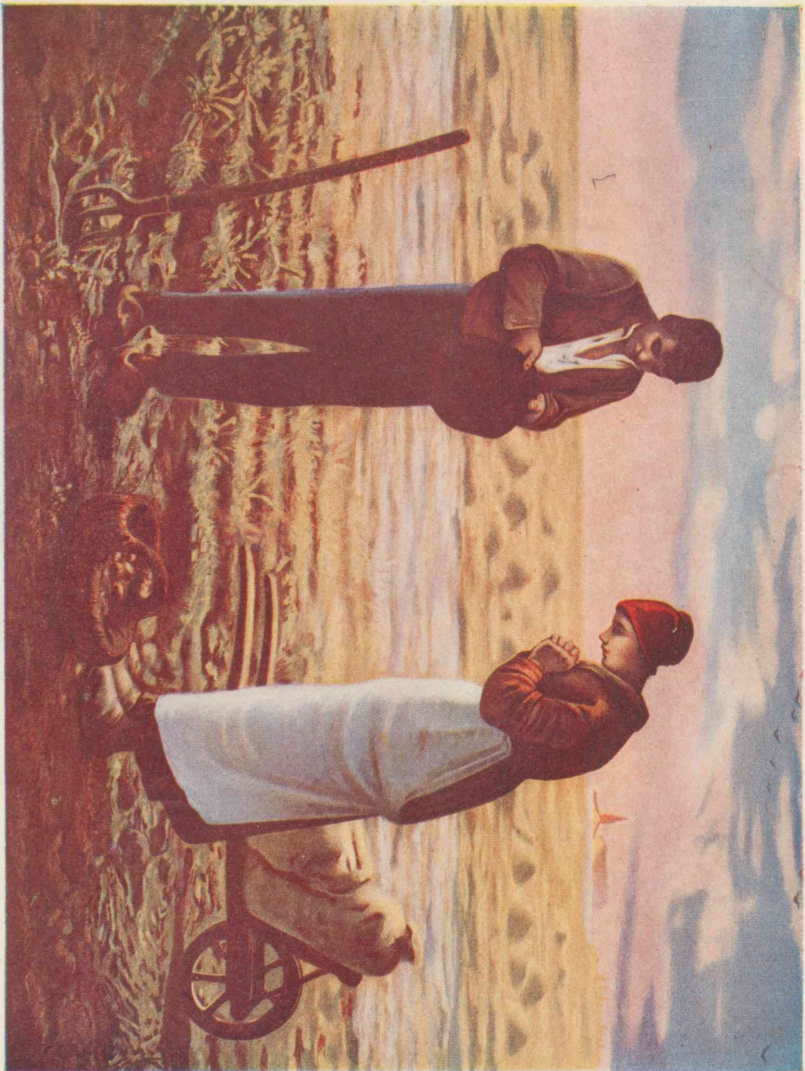
しめたのです。

英國のホイスラーと同時に、フランスで純粹な畫といふことを強く主張したマナーは、彼のミレーの「晩鐘」を指して、馬鈴薯の祈禱と嘲笑しました。是は少し酷ですが、革命期の闘士の言葉としては已む

フレスコ
壁畫。

を得ますまい。ミレーのあの畫には宗教的の考も交つては居るて
せうが、又それと同時に、相當の畫的要素をも具へて居ます。歴史畫
や宗教畫は近代になつて殆ど廢りました。基督教畫題としては、文
藝復興の初期の人々の手によつて、イタリヤの諸寺院の壁に残され
たフレスコ畫に優るものはありません。基督教やギリシヤ神話に
通じて居なければ、西洋の畫を味はふことは出来ないといふやうに
言ふ人もありますが、さういふ知識が無くても、畫的要素だけは感じ
られる譯です。唯さういふ知識があれば、附加的の興味があるとい
ふまでです。

日本人の多くは、肖像畫を單に實人に似せるだけの使命しかない
ものと考へてゐますが、非常な間違です。肖像畫は其の畫かれた時
代を離れ、ば、最早實人に似る似ないの興味は失はれて、其處には畫
的要素だけが残る筈です。西洋新古の肖像畫には、純粹の畫として



(作ヘミ)

鐘

晚

即寫
スケッチ。

立派な物が多い。どうかして日本にも肖像畫の理解を普くさせ、畫として立派なものが出るやうにしたいと思ひます。肖像畫を味はふことを知らない人が多いと同時に、靜物畫をもつまらなく思ふ人があります。花などの眞に近いのは綺麗だと認めてゐますが、何の爲に林檎や饅頭を列べて畫くのかと怪しむ人は可なりある。純粹な畫的興味の外には其處に何も無いのです。靜物畫は食堂へ掛けるもののやうに思つて居る人もありますが、それも狭い考です。普通の畫と裝飾風の畫、此の二つのもの間に截然たる垣はありません。裝飾的要素の分量の多いのを裝飾畫と呼び、寫實の分量の多いのを普通の畫として置くまでです。東洋の畫には概して裝飾的の分子が多いと言へます。裝飾的の畫を普通の畫の下位に在るやうに思ふのも間違です。畫には又即寫クローキと、研究畫エッチュウドと、一幅ワットの畫との區別があります。即寫や

コンステブル
英國最近の風景畫家。一七七六—一八三七年。

研究畫に比して、タブローがより多くの考慮を経た完成したものであることは言ふまでもないが、近代では、是等三者の價値が殆ど平等に見られる傾を有つて居ます。昔は展覽會へ出したりするのはタブローでなければならぬと思はれて居たやうですが、近頃では即寫や研究畫をも平氣で出すやうになりました。即寫は即寫として見なければなりません。それには専ら感興的に動いた筆の迹を味はふべきです。英國のコンステブルの風景畫などに就いて見ますと、却つて完成したタブローよりも、小さな即寫の類に元氣の潑刺としたいゝものがあるやうです。

要するに、畫を観るのに最も肝腎なことは、種々の先入見を取去つて、直覺によつて畫の本領を味はふことです。人物なり、風景なり、程度こそあれ、もとく自然を寫したものですから、畫を観た場合、觀者の自然に關する聯想の起ることを防ぎ得ませんが、聯想の起る度合

如何で畫の優劣を極めたりなぞしてはなりません。畫の善惡は固よりその背後に存する人格の如何に歸せられます。觀者は筆なり色なり形なり、畫の表面に現れた所を辿つて、畫家の人格に觸れます。形式や畫風の如何は問ふ所ではありません。彼の極端な立體派の作品にしましても、矢張優れた人格の人のやつたのと、平凡な追從者のやつたのとは、格段の相違があります。

二五 文學と人生

藤井健次郎

諸君、文學とは何か。文學は人生の縮圖である。海のやうに廣い人生の中に表れた百般の姿相を、鹽のやうに狭い表面の上に、さながらに描寫したものである。

然らば人生とは何か。よく世間では、吉凶禍福は糾へる繩の如し。と言ふが、人生の運命は營に糾つた繩の如きのみではない。かの大

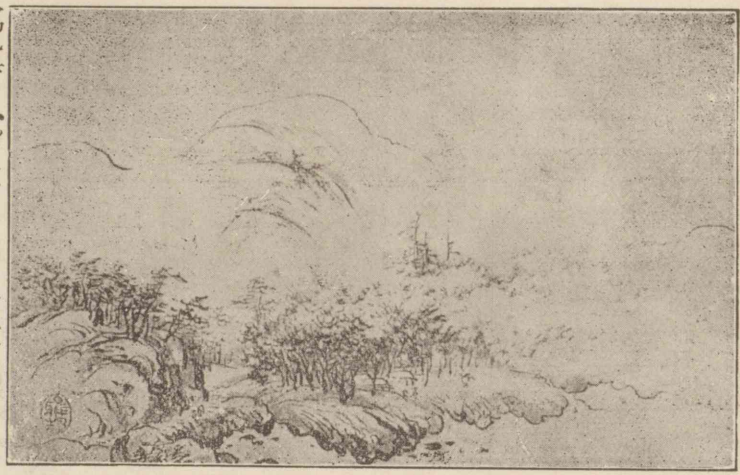
藤井健次郎
哲學者。文學博士。京都帝國大學教授。山形縣の人。

プロヂュース
産出。

空に横たはつた雲のやうに、有るかと思れば消え、消えたかと思れば
涌き、峯かと思れば谷、龍かと思れば虎、乍ちにして淡く、乍ちにして濃
く、變幻出沒、殆ど端倪することの出来ないやうなものである。唯此
の一片の雲でさへ、少からず吾等の感興を惹くものを、それよりも更
に奇妙で、更に變化のある此の人生の波瀾、動搖が、どうして吾等の感
興を惹起さずに止らう。人生は畢竟プロヂュースである。變幻出
沒極りないのが人生の姿相である。これが人生であるかと思れば、
忽ち其の姿を變へ、それが真相かと思れば、又忽ち消えて跡を晦ます。
凡手は容易に之を捉へることが出来ず、凡眼はなか／＼其の真相を
認めることが出来ない。而も捉へ難ければ捉へがたい程、認めにく
ければ認めにくい程、之を捉へたいと思ふのは、誰しもの人
情である。然るに詩人は其の靈妙な腕と、其の鋭敏な眼とを以て、プ
ロヂュースの眠つて居る不用意の間に之を捉へて來て、それを世人

の前に示すのである。是が文學である。そこで世人は堪らない。

雅邦
橋本氏。東京
美術學校教授。
明治四十一年
歿。年七十四。
瀟湘
支那湖南省洞
庭湖の南にあ



(筆邦雅) 雨 夜 湘 瀟

自分の熱望の目的物が眼前に現れ
るから、人の視線はこれに吸ひつけ
られ、觀ても觀飽く事を知らないの
である。文學は人生の縮圖である
と云ふ。其の大體の意味は今言つ
た通りであるが、猶爰に一つの疑が
残つて居る。それは外でもない、其
の縮圖とはどういふ意味かといふ
事である。雅邦の描いた瀟湘の八
景は、かの楊子江の大觀の縮圖であ
る。又其の邊で賣つて居る八景の
寫眞も、やはり同じ大觀の縮圖であ
る。寧ろ寫眞の方は實際の通り一

る川。八景は
平沙落雁。山
浦歸帆。天
晴嵐。江天
雪。洞庭。照
滿。雨。涼
寺。晚鐘。涼
夕照。風煙。

木一石少しも實景と違はずに寫されて居るが、雅邦の描いたものはさうでない。精密に見れば、實際に生えて居ない木が生えて居たり、實際にある巖が省かれて居たりする。併しながら兩者共にかの美しい景色の縮圖たるに於ては同一である。文學は人生の縮圖であると云ふ。其の縮圖は彼の雅邦的縮圖の意か、寫眞的縮圖の意か、是が残つて居る所の問題である。

此の問題には一刀兩斷に答へる事が出来る。凡そ文學ともあらう程のものは、必ず雅邦的の縮圖であり、又あるべきものである事は疑がないと思ふ。成程たゞ縮圖といふ點から見たならば、寫眞の方は遙かに精密な縮圖であらう。併し今少し他の點から考へれば、さうは言へないのである。凡そ物には要と云ふ點がある。其の要を捉へさへすれば、其の他は之を擧げる必要もなく、又寧ろ擧げてはならないのである。實際のものには穢い所もあり、醜い所もあり、又不

完全な所もある。必要の點以上に、是等の點以上に、是等のものをも残らず擧げる時には、却つて吾等の感興を害ひ、吾等の想像を破つて、かの江邊の美を發揮しようとした折角の努力の如きも、却つて失敗の基となるのである。それ故たゞ江邊の美觀の極めて肝要な場所をば、極めて遒勁に描いて、其の他は總べて觀者の想像に任せる方が、其の美觀を眞に發揮する所以であらうと思ふ。それ故美を發揮する方からいへば、雅邦的縮圖こそ眞正の縮圖であると言はなければならぬ。そこで此の人生百般の姿相を捉へて、吾等が美的感興の對象となし、美的趣味を満足せしめようと云ふ文學は、必ず雅邦的縮圖たり、又、たるべき事は、殆ど絮説するの必要もないことと信ぜられる。諸君、文學とは何か。文學は人生の救である。凡そ吾等に苦しみ惱みのあるのは、「我」といふものがあるからである。「我」があるがゆゑに空な望を起し、限ない欲を逞ましうしようとするのである。「我」が

聖人
釋迦

あるが故に限のない世間の譽の奴となり、限ない黄金の僕となるのである。「我」があればこそ憎悪もあり、怨恨もあるのである。名譽の奴となり、黄金の僕となり、憎悪、怨恨の焰に燃されるからこそ、此の世に苦しみと云ふものがあるのである。さればこそ菩提樹下に大悟徹底せられた聖人も、我をもて一切苦の根本とせられたのである。若し吾等にして此の我執を離れ、妄見を脱する事を得たならば、吾等の意は如何に安らかに、吾等の情は如何に爽かであらう。さうして吾等をして此の我執を離れ、妄見を脱せしめる所の易行道は何であるか。それは文學に外ならぬのである。吾等が美しい詩や歌を吟詠し、戯曲・小説を玩味する時には、全く身を一種の別天地に移して、一切の我執・妄見は茲に全く消滅して、讀行く自己と讀まれる文學とが一つに融けて形もなくなり、唯々量り知られぬ歡樂の境にあるが如き思のするものである。而も是は啻に一時の救ばかりではなく、永く

吾等の生涯に影響を及すものである。固より獨り文學と謂はず、其の他の藝術も皆吾等を靈化する力を持つて居るには相違ないが、音樂なり繪畫なりは比較的専門の技術的要素が多く、普通の人は其の力に繼つて十分の救を得ることが出來ない。然るに文學には比較的さういふ専門的要素が少い。其の文章を解し得る人でさへあれば、誰でも其の救の力を享けることが出来る。これ文學は解脱の易行道であると云ふ所以である。

凡そ吾等人間を救ふものに三つある。第一は今述べた文學の力、第二は道德の力、第三は宗教の力である。文學は感情によつて直覺的に救の任務を果さうとし、道德は意志によつて漸進的に救はうとし、宗教は其の中間に立つて半面は感情によつて、半面は意志によつて救はうとするものである。此の三者は此の如く分けのぼる麓の路に於てこそ違へ、つまりは同じ高嶺の月を見ようとするものである。

分けのぼる
の道は多けれ
ど同じ高嶺の
月をこそ見れ。

る。斯様に考へれば、其の何れの道に由つて救を求めものも、其の人の自由であつて、必ずしも己に同じ者に黨して、異なる者を伐つ必要のない事は明らかである。然るに世人は此の事を忘れて、所謂文藝派の人々と、所謂道學派の人々と、互に相闘ぐが如き愚を演じてゐる。

併し斯く言へば、或は必ず、單に文學か道德かの一方によつて、果して全き人格の救が得られようか。」と、問ふものがあるであらう。私は必ず之に對して、「可能である。」と答へる。眞に美なるものは又必ず善を兼ね、眞に善なるものは又必ず美を含んで居るものである。善を兼ねない美はなく、美を含まない善はない。されば眞に美なる文學によつて救はれる者は、人格全體の救であり、眞に善なる法則によつて救はれるものも、矢張人格全體の救であると思ふ。

諸君、文學とは何か。文學は人生の力である。將に冤罪の刃の下

絶句
律句

禪僧

鎌倉圓覺寺開
山祖元。

一絶

乾坤無地卓卓
孤筇、喜得人喜
空法亦空。珍珍
重重大元三尺劍、
電光影裏斬斬
春風。

詩賦

宋の文天祥の
正氣歌。

新曲浦島

坪内逍遙の作
つた樂劇。

に無慚の最期を遂げようとした禪僧が、纔かに生命を全うすることを得たのは、果して何の力によるか。彼が死に臨んで泰然として吟詠した一絶の力ではないか。幾多亡國の志士をして感奮興起せしめた詩賦は、今日猶凛として生氣があり、まことに懦夫を起たしめる概があるではないか。徒に理想にあこがれて、老いた父母にさんざん歎を見せ、あとでやつぱり其の父母が慕はしくなつて、現實界に來た「新曲浦島」の太郎は、幾多の熱血の湧きかへる青年に向つて、理想は現實を離れて求めることは出來ない、唯此の現實界をさながらに淨土と觀じ、極樂と化すべきものであるといふ信念を鼓吹したのではなからうか。文學は人生の力である。此の力を得て此の力を利用しようとし、此の力によつて其の天福に與らうとする努力は、凡そ人間の努力中にあつて、最も神聖な、最も高い努力の一つである。宗教家は其の力を利用して、自己の信ずる福音を傳へ、政治家は其の力を

利用して治國濟民の具としたことは、古今東西その例に乏しくない。文學は人生救済の具として、道德・宗教と並び立つものである。従つて、是等三者の間には、互に相聯絡交通する所がある。故に文學の力の最も直接に其の影響を及すのは、道德の方面である。今文學創作者の立場からてなく、社會現象の一つとして文學を見る時には、其の影響は直接又は間接に益・道德を助けて、之を高尙にするか、若しくは其の反對に直接又は間接に道德を破つて之を墮落せしめるかといふ問題に歸着する。文學は人間をもよほすものとする。斯様にいろいろの影響があるから、見る人に依つて小説の批評も違ふ。老人輩は「近頃の稗史・小説は實に風教を害することの甚だしいものである。あれ等は嚴重に取締らねばならない。」といひ、青年輩は「美は美なり、風教を害すると害せざると、我に於て何かあらん。」というて、現代の作物を歓迎する。固より私は現代の作物を上乗の

文學と心得て、之を辯護するものではない。併し矢張青年の云ふ様に美は美の繩張があるから、一概に風教云々を以て一齊に止める事は出来ぬ。さればと云うて、現代の作品ばかりを得て、之に満足し、更に高尙な物のあることを遺れて居るかの様な態度にも賛成することが出来ぬ。文學と風教との關係問題は、理想境に達しない現實の世界、現實の人生に於ては、つまるところ一時の改革問題と趣味問題とに歸着する。現今の道德に悖戻するやうな文學は、一時の機宜として、之を禁止することは、政策上已むを得ないことであらう。併し又一般讀者の趣味が、漸々微妙に、漸々高尙になれば、文學上の作品も漸次理想に近づくことであらう。要するに理想は善美一致の境地であるのである。〔時代思潮〕

自修文

恩讐の彼方に

菊池寛

菊池寛
小説家。明治
二十二年高松
市生。
享保九年
八代將軍吉宗
の時。近松門
左衛門の歿年
に相當する。
彼
市九郎。
羅漢寺
耶馬溪中の名
刹。

享保九年の秋であつた。彼は赤間ヶ關から小倉に渡り、豊前の國宇佐八幡宮を拜した後、山國川を溯つて者闇窟山羅漢寺に詣でんものと、四日市から南に赤土の茫々たる野原を過ぎ、道を山國川の溪谷に添うて辿つた。筑紫の秋は驛路の宿り毎に更けて、雑木の林には、蘆赤く爛れ、野には稻黄色く實り、農家の軒には此の邊の名物の柿が眞紅の珠を聯ねて居た。それは八月に入つて間のない或日であつた。彼は秋の朝の光に輝く山國の清冽な流を右に見ながら、三口から佛坂の山道を越えて、午近き頃樋田の驛に着いた。淋しい驛で晝食の齋に有付いた後再び山國谿に添うて南を指した。樋田驛から出外れると、道は又山國川に添うて、火山岩の河岸を傳うて走つて居た。

歩み難い石高道を、市九郎は、杖を頼りに辿つて居た時、ふと道の傍に此の邊の農夫であらう、四五の人々が罵り騒いで居るのを見た。市九郎が近付くと、その中の一人は早くも彼の姿を見付けて、

「御出家様、これはよい所へ來られた。非業の死を遂げた哀な亡者ぢや。通りかゝられた縁に、一遍の回向をして下され。」と頼んだ。

非業の死だと聞いた時、剽賊おびはの爲にあやめられた旅人の屍骸ではあるまいかと思つた市九郎は、自分の過去の過去の悪業を想ひ起して、刹那に湧く悔恨の心に、兩脚の竦むのを覺えた。それは水死した男の屍骸であつた。

「見れば水死人のやうぢやが、所々肉の破れて居るのは如何した仔細ぢや。」と市九郎は恐る／＼訊いた。

「御出家は旅の人と見えて、御存じあるまいが、此の川を半町も上れば、鎖の渡と云ふ難所がある。山國谿第一の切所で、南北往來の人馬が、悉く難儀する所ぢやが、此の男は此の川上の柿坂郷に住んで居る馬士ぢやが、今朝鎖の渡の中途で馬が狂うた爲、五丈に近い所を真逆様に落ちて、見られる通りの無慚な最

期ぢや。」

と、其の中の一人が言つた。

「鎖の渡と申せば、かね／＼難所とは聞いて居たが、斯様なあはれを見ることは、度々ござるか。」

と、市九郎は死骸を見守りながら、打ちしめつて聞いた。

「一年に三四人、多ければ十人も思はぬ憂き目を見ることがある。無雙の難所故に、風雨に、棧かきが朽ちても、修繕も思ふに、委かせぬのぢや。」

と答へながら、百姓達は死骸の始末にかゝつてゐた。

市九郎は此の不幸な遭難者に一遍の經を讀み了ると、足を早めてその鎖の渡へと急いだ。

其處迄はもう一町と隔つて居なかつた。見ると、川の左に聳えて居る山が、山國川に臨む所で、十丈に近い絶壁に、斫り截たれて、其處に灰白色のきざ／＼した、巖の多い肌を露出して居るのであつた。山國川の水は、其の絶壁に吸寄せられたやうに、此處へ慕ひ寄つて、その裾を洗ひながら、濃緑の色を湛へて、渦巻いて居るのであつた。

里人等が鎖の渡と言つたのはこれだらうと、市九郎の思つた平坦な道は、その絶壁に絶たれてしまつて、その中腹を、松杉などの丸太を鎖で聯ねた棧橋が危げに傳つて居る。かよわい婦女子でなくとも、俯して五丈に餘る水面を見仰いで頭を壓する十丈に近い絶壁を見る時は、魂消え、心戦くのも理であつた。市九郎は岩壁に縋りながら、戦く足を踏占めて、漸く渡り終つて、其の絶壁を振向いて見た。其の刹那であつた、彼の心に、咄嗟に、ある大誓願が勃然として萌したのである。

積むべき贖罪の餘りに小さかつた彼は、自分が精進勇猛の氣を試すべき難業に逢ふことを祈つて居た。今目前に行人が艱難し、一年に十に近い人の命が奪はれる難所を見た時、自分の身命を捨てて、此の難所を除かうといふ思付が、旺然として起つたのも無理ではなかつた。二百間に餘る絶壁を刳り貫いて道を通じようといふ不敵な誓願が、彼の心に浮かんで來たのも無理ではなかつた。市九郎は自分が求め歩いたものが、漸く茲で見付かつたと思つた。一年に十人を救へば、十年には百人、百年、千年と經つ内には、千萬の人を救ふことが出來ると思つたのである。かう決心すると、彼は一途に實行に着手した。

その日から、羅漢寺の宿坊に宿りながら、山國川に添うた村々を勸化して、隧道開鑿の大業の寄進を求めたのである。が、何人も此の邊には馴染のない此の風來僧の言葉に耳を傾けなかつた。

「三町をも超える大盤石を刳り貫かうと云ふ、瘋狂人ぢや、はゝゝゝ。」と嗤ふものは、まだよい方であつた。

「大驅りぢや、針のみゝから天をのぞくやうな事を言前にして、金を集めようと云ふ大驅りぢや。」

と、市九郎の勸説に、迫害を加ふる者さへあつた。

市九郎は一月にも近い間、勸進に努めたが、何人も耳を傾けぬのを知ると、奮然として、獨立此の大業に當ることを決心した。彼は石工の持つ錘と鑿とを手に入れると、自分たつた一人で、此の大絶壁の一端に立つた。夫は一箇のカリカチュアであつた。削落し易い火山岩であるとはいへ、川を壓して聳え立つ峨々たる大絶壁を、市九郎は自分一人の力で刳り貫かうとするのであつた。「到頭氣が狂つた。」

と、行人は市九郎の姿を指しながら嗤つた。

カリカチュア
漫畫。

然し市九郎は屈しなかつた。山國川の清流に沐浴して、觀世音菩薩に祈誓を籠めた後、渾身の力を籠めて、第一の鎚を下したのである。が、それに應じて、たゞ二三片の碎片が飛散つたばかりであつた。再び力を籠めて第二の鎚を下した。更に二三片の小塊が巨大なる無限大の大塊から分離したばかりであつた。市九郎は少しも失望しなかつた。第三、第四、第五と彼は懸命に鎚を下した。空腹を感じれば近郷を托鉢し、腹滿つれば絶壁に向つて鎚を下した。懈怠の心が生ずれば、眞言を唱へて勇猛の心を振起した。一日、二日、三日、市九郎の努力は間斷なく續いた。旅人はその傍を通る度に嘲笑の聲を送つた。が、市九郎の心は、その爲に須臾も撓むことはなかつた。嗤笑の聲を聞けば、彼は更に鎚を持つ手に力を籠めた。

やがて市九郎は雨露を凌ぐ爲に、絶壁に近く木小屋を建てた。朝は山國川の流が星の光をうつす頃から起出で、夕は瀬鳴の音が寂靜の天地に澄みかへる頃までも、鎚を振る手を止めなかつた。が、行路の人々は、尙嗤笑の言葉を止めなかつた。

「身の程を知らぬたはけぢや。」

と、市九郎の努力を眼中に置かなかつた。が、市九郎は一心不亂に鎚を振つた。鎚を振つて居さへすれば、彼の心には何の雜念も起らなかつた。人を殺した悔恨も、其處に無かつた。極樂に生れようといふ欣求もなかつた。たゞそこに晴々とした精進の心があるばかりであつた。彼は出家して以來、夜毎の寢覺に、身を苦しめた自分の惡業の記憶が、日に薄らいで行くのを感じた。彼は、益々勇猛の心を振ひ興して、一向專念に鎚を振つたのである。

新しい年が來た。春が來て、夏が來て、早くも一年が經つた。市九郎の努力は空しくはなかつた。大絶壁の一端に、深さ一丈に近い洞窟が穿たれて居た。それはほんの小さい洞窟ではあつたが、市九郎の強い意志は最初の爪痕を明らかに止めて居た。

「あれ見られい。狂人坊主があれ丈掘りをつた。一年の間もがいて、たつたあれ丈ぢや。」

と嗤つた。が、市九郎は自分の掘り穿つた穴を見ると、涙の出るほど嬉しかつた。それはどんなに淺くとも、自分が精進の力の如實に現れて居るものに相違なかつた。又一年が經つた。市九郎は年を重ねて更に振ひ立つた。夜は

如法の闇に、晝も尙薄暗い洞窟の裡に端坐して、たゞ右の腕のみを、狂氣の如くに振つて居た。市九郎に取つて右の腕を振る事のみが、彼の宗教的生活の凡てになつてしまつた。洞窟の外には、日が輝き、雨が降り、嵐が荒んだが、洞窟の中には間斷なき鈍の音のみがあつた。

二年の終にも、里人は尙嗤笑を止めなかつた。が、夫はもう聲にまでは出て來なかつた。たゞ市九郎の姿を見た後、顔を見合せて、互に嗤ひ合ふ丈であつたが、更に一年経つた。市九郎の鈍の音は山國川の水聲と同じく不斷に響いて居た。村の人達はもう何とも言はなかつた。彼等が嗤笑の表情は、何時の間にか驚異のそれに變つて居た。市九郎は長い間梳らない爲に、頭髮は、何時の間にか伸びて、双肩に掩ひかゝり、浴せざれば垢ついて、人間の姿とも見えなかつた。彼は自分が掘り穿つた洞窟の裡に、獸の如く蠢きながら、狂氣の如くその鈍を振ひつゝ居たのである。

里人の驚異は何時の間にか同情に變り始めて居た。市九郎が暫しの暇を竊んで、托鉢の行脚に出かけようとする、洞窟の出口に思ひがけなく、一椀の齋を見出すことが多くなつた。市九郎はその爲に托鉢に費すべき時間を更

に絶壁に向ふ事が出來た。

四年目の終が來た。市九郎の掘り穿つた洞窟は、もはや五丈の深さに達して居た。その三町を超える絶壁に比ぶれば、それは物の數でもなかつた。里人は市九郎の熱心に驚いたものの、未だかくばかり見えすいた徒勞に合力するものは一人もなかつた。市九郎はたゞ獨りその努力を續けねばならなかつた。が、もう掘り穿つ仕事に於て、三昧に入つて居た市九郎は、たゞ鈍を振ふ外は何の存念もなかつた。土鼠いもねずみのやうに、命の有るかぎり掘り穿つて行く外には、何の他念もなかつた。彼は只一人黙々として掘り進んだ。洞窟の外には春が去つて秋が來て、四時の風物が移り變つたが、洞窟の中には不斷の鈍の音のみが響いた。

「可哀さうな坊様ぢや。物に狂つたと見え、あの大盤石を穿つて行くは。十の」

と行路の人々は市九郎の空しい努力を悲しみ始めた。が、一年経ち二年経ち、丁度九年目の終に、市九郎の穿つた穴は、入口より奥まで二十二間を計るまでに掘り進んで居た。

樋田郷の里人は、始めて市九郎の事業が可能であるのに氣が付いた。一人の瘦せ果てた乞食僧が、九年の力でこれ迄掘り穿ち得るものならば、人を増し、歳月を重ねたなら、此の大絶壁を穿ち貫く事も、必ずしも不思議な事ではないといふ考が、里人等の胸の内に銘せられて來た。九年前、市九郎の勸進を擧つて斥けた山國川に添ふ七郷の里人は、今度は自發的に開鑿の寄進に附き始めた。數人の石工が市九郎の事業を援ける爲に雇はれた。もう市九郎は孤獨ではなかつた。岩壁に下す多數の鎚の音は勇ましく賑やかに、洞窟の中から洩れ始めたのである。が、翌年になつて里人達が工事の進み方を測つた時、それがまだ絶壁の四分の一にも達して居ないのを發見すると、彼等は再び落膽疑惑の聲を洩した。

「人を増しても、とても成就はせぬ事ぢや。あたたら了海どのに騙されて入らぬ物入をした。」

と彼等は抄取らぬ工事に何時の間にか倦み始めて居た。市九郎は又獨り取残されねばならなかつた。彼は自分の傍に鎚を振る者が一人減り、二人減り、遂には一人も居なくなつたので氣が付いた。が、決して去る者は追はなかつ



門 洞 奇

た。黙々として自分一人その鎚を振ひ續けて行くのであつた。

里人の注意は、全く市九郎の身邊から離れてしまつた。殊に洞窟が深く穿たれば穿たれるほど、その奥深く鎚を振ふ市九郎の姿は行人の眼から遠ざかつて行つた。人々は闇の裡に閉された洞窟の中を透しながら、

「了海さんは、まだやつて居るのかなあ。」

と疑つた。が、さうした注意も、しまひには段々薄れてしまつて、市九郎の存在は里人の念頭から屢々消え失せようとした。が、市九郎

の存在が里人に對して没交渉である如く、里人の存在も亦市九郎には没交渉であつた。彼にはたゞ眼前の大岩壁のみが存在するばかりであつた。

市九郎は洞窟の中に端坐し始めてから、もはや十年にも餘る間暗い冷たい石の上に坐り續けて居た爲に、顔は蒼ざめ、雙の目は窪んで、肉は落ち、骨は露れ、此の世に生けるものの姿とも見えなかつた。が、市九郎の心には、不退轉の勇猛心が頻りに燃えさかつて、たゞ一念に穿ち進む外には何物もなかつた。一分でも一寸でも、岩壁の削り取られる毎に、彼は歡喜の聲を揚げた。

市九郎はたゞ一人取残されたまゝに、又三年を経た。すると、何時の間にか里人達の注意は、再び市九郎の上に歸りかけて居た。彼等がほんの好奇心から洞窟の深さを測つて見ると、全長六十五間、川に面する岩壁には、採光の窓が一つ穿たれ、もはや此の大岩石の三分の一は、主として市九郎の脗腕に依つて貫かれて居る事が判つた。

彼等は再び驚異の眼を刮いた。過去の無智を恥ぢた。市九郎に對する尊崇の心が再び彼等の心に復活した。やがて、寄進された十人に近い石工の鎚の音が、再び市九郎のそれに和した。

又一年経つた。一年の月日が経つ裡に、里人達は何時かしら目先の遠い出費を悔い始めて居た。寄進の人夫は、何時の間にか一人減り、二人減つて、おしまひには市九郎の鎚の音のみが洞窟の闇を打顛はして居た。が、傍に人が居ても居なくても、市九郎の鎚の力は變らなかつた。彼はたゞ機械の如く、渾身の力を入れて、鎚を舉げ、渾身の力を以て之を振り降した。彼は自分の一身をさへ忘れて居た。主を殺した事も、剽賊を働いたことも、人を殺したことも、凡ては彼の記憶の外に薄れてしまつて居た。

一年経ち二年経つた。一念の動くところ、彼の瘦せた腕は鐵の如く屈しなかつた。丁度十八年目の終であつた。彼は何時の間にか、岩壁の二分の一を穿つて居た。

里人は此の恐ろしき奇蹟を見ると、もはや市九郎の仕事を少しも疑はなかつた。彼等は前二回の懈怠を心から恥ぢ、七郷の人々が、合力の誠を盡くして、舉つて市九郎を援け始めた。その歳、中津藩の郡奉行が巡視して、市九郎に對して賞美の言葉を下した。近郷近在から三十人に近い石工が蒐められた。工事は枯葉を焼く火のやうに進んだ。

人々は衰殘の姿いたくしい市九郎に、
「もはや、そなたは石工どもの棟梁をなさりませ。自ら鎚を振ふには及びませぬ。」

と勧めたが、市九郎は頑として應じなかつた。彼は瘡るれば、鎚を握つたまゝ倒れたいと思つて居るらしかつた。彼は三十の石工が傍に働くのも知らぬやうに、寢食を忘れて、懸命の力を盡くすこと、少しも前と變らなかつた。が、人が市九郎に休息を勧めたのも、無理ではなかつた。二十年にも近い間、日の光も射さぬ岩壁の奥深く、坐り續けた爲であらう、彼の兩脚は永い端坐に傷み、何時の間にか屈伸の自在を缺いて居た。僅かの歩行にも杖に頼らねばならなかつた。

その上長い間、闇に坐して日の光を見なかつた爲であらう、また不斷に彼の身邊に飛散る碎けた石の碎片が、その眼を傷けた爲でもあらう。彼の兩眼は朦朧として光を失ひ、物のあいろも辨へかねるやうになつて居た。

さすがに、不退轉の市九郎も、身に迫る老衰を痛む心はあつた。身命に對する執着はなかつたけれど、中道にして瘡れることを何よりも無念と思つたか

らである。

「もう二年の辛抱ぢや。」

と、彼は心の裡に叫んで、身の老衰を忘れようと、懸命に鎚を振ふのであつた。

冒し難き大自然の威嚴を示して、市九郎の前に立ちふさがつて居た岩壁は、何時の間にか衰殘の乞食僧の鐵のやうな心に貫かれてその中腹を穿つ洞窟は、命ある者の如く一路その核心を貫かんとして居るのであつた。

刳貫の工事が成就に近づくに従つて、市九郎の健康は、過度の勞働に依つて、痛ましく傷つけられた。彼に取つて、それよりもつと恐ろしい敵が、彼の生命を狙つて居るのであつた。

市九郎の爲に非業の横死を遂げた中川三郎兵衛は、家臣の手にかゝつた事から、家事不取締とあつて、家は取潰されてしまつて、その時三歳であつた一子の實之助は、縁者の爲に養ひ育てられる事になつたのである。

實之助は十三になつた時、彼は初めて、自分の父が非業の死を遂げたことを聞いた。殊に相手が對等の士人でなくして、自分の家に養はれた奴僕であることを知ると、少年の心は無念の憤に燃えた。彼は即座に復讐の一儀を肝深

中川三郎兵衛
了海の舊主で
江戸の旗本。

く銘じた。彼は柳生の道場に入つて、劍道の修業に肝膽を砕いた。十九の年に免許皆傳を許されると彼は欣び勇んで報復の旅に上つたのである。若し首尾よく本懐を達して歸れば、一家再興の肝煎もしようといふ親類一同の激勵の言葉に送られながら。

實之助は馴れぬ旅路に多くの艱難を苦しみながら、諸國を遍歴して、只管敵市九郎の所在を求めた。市九郎をたゞ一度さへ見た事もない實之助に取つては、それは雲を掴むが如き覺束ない搜索であつた。五畿内東海東山山陰山陽北陸南海と彼は漂泊の旅路に、年を送り年を迎へ、二十七の年まで空虚な遍歴の旅を續けた。敵に對する怨も憤も、旅路の艱難に銷磨せんとすること一度であつた。が、非業に殞れた父の無念を思ひ、中川家再興の重任を考へると、奮然と志を振ひ興すのであつた。

江戸を立つてから丁度九年目の春を、彼は福岡の城下に迎へた。本土を空しく尋ね歩いた後に、邊陲の九州をも探つて見る氣になつたのである。

福岡の城下から中津の城下に移つた彼は、二月に入つた一日、宇佐八幡宮に參つて、本懐の一日も早く達せられんことを祈念した。

實之助は參拜を終へてから、境内の茶店に憩うた。其の時にふと彼の傍の百姓體の男が、居合せた參詣客に次のやうに話すのを聞いたのである。

「その御出家と云ふのは、元は江戸から來たお人ぢやげな。若い時に人を殺したのを懺悔して、諸人濟度の大願を起したさうぢやが、今言うた樋田の刎貫は、此の御出家一人の力で出來たといつてもよい位ぢや。」
と、百姓が言つた。

此の話を聞いた實之助は、九年此の方未だ感じなかつたやうな興奮を覺えた。彼はやゝ急きこみながら、

「卒爾ながら少々物を訊ねる。その出家と申すは、年の頃は何程位ぢや。」
と訊いた。その男は、自分の談話が武士の注意を惹いた事を光榮であると思つたらしく、

「左様でございますな。私はその御出家を拜んだ事はございませんが、人の噂ではもう六十に近いと申します。」

「丈は高いか、低いか。」

と實之助は疊みかけて訊いた。

「それもしかとは判りませぬ。何様洞窟の奥深く居られる故、しかとは判りませぬ。」

「その者の俗名は、何と申したか、存せぬか。」

「それもとんと判りませんが、お生れは越後の柏崎で、若い時に江戸へ出られたさうでござります。」

と、百姓は答へた。

茲まで聞いた實之助は、躍り上つて欣んだ。彼が江戸を立つ時に親類の一人は、敵は越後柏崎の生れ、故郷へ立廻るかも計りがたい。越後は一入心を入れて探索せよといふ注意を受けて居たのであつた。

實之助は、これを正しく宇佐八幡の神託ではあるまいかと勇み立つた。彼はその老僧の名と、山國谿に向ふ道とを訊くと、もはや八つ刻を過ぎて居たにも拘らず、必死の力を雙脚に籠めて、敵の所在へと急いだ。そしてその日の初更近く、樋田村に着いたのである。彼は直ちに洞窟へ立向はうかと思つたが、急いではならぬと思ひ返して、その夜は樋田驛の宿に、焦慮の一夜を明かすと、翌日は早く起出でて、輕装して樋田の刳貫へと向つた。

刳貫の入口に着いた時、彼はそこに石の碎片を運び出して居る石工に訊ねた。

「此の洞窟の中に、了海と云はるゝ御出家がおはすさうぢやが、それに相違ないか。」

「おはさないで何としよう。了海様は此の洞の主も同様な方ぢや、はゝゝ」と、石工は心なげに笑つた。

實之助は本懐を達する事はや眼前に在りと欣び勇んだ。が、彼は周章ててはならぬと思つた。

「して、出入の口は此處一箇所か。」

と訊いた。敵に逃げられてはならぬと思つたからである。

「それは知れた事ぢや。向うへ口を開ける爲に、了海様は塗炭の苦しみを爲さつて居るのぢや。」

と、石工が答へた。

實之助は多年の怨敵が囊中の鼠の如く、目前に置かれてあるのを欣んだ。

たとひその下に使はれる石工が幾人居ようとも、斬り殺すに何の難作がある

べきと勇み立つた。

「其方に少し頼みがある。了海どのに御意得たい爲、遙々と尋ねて參つたものぢやと傳へてくれ。」

と言つた。石工が洞窟の中へはひつた後で、實之助は一刀の目くぎを濕した。彼は心の裡で生來初めて廻り逢ふ敵の容貌を想像した。洞門の開鑿の棟梁をして居ると云へば、五十は過ぎて居るとは云へ、筋骨たくまじき男であらう。殊に若年の頃には兵法に疎からざりしと云ふのであるから、油断はならぬと思つて居た。

暫くして實之助の面前へ洞門から出て來た一人の乞食僧があつた。それは出て來るといふよりも、墓の如く匍ひ出て來たといふ方が適當であつた。それは人間といふよりも、むしろ人間の殘骸といふべきであつた。肉悉く落ちて、骨露れ、脚の關節以下は處々爛れて、永く正視するに堪へなかつた。破れた法衣に依つて、僧形とは知れるものの、頭髮は長く延びて皺だらけの額を掩うて居た。老僧は灰色を爲した眼をしばたきながら、實之助を見上げて、

「老眼衰へはてまして、孰れの方とも辨へ兼ねます。」

と言つた。

實之助の極度まで張詰めて來た心は、此の老僧を一目見た刹那たちくとなつてしまつた。彼は心の底から憎惡を感じ得るやうな惡僧を欲して居た。然るに彼の前には、人間とも屍骸ともつかぬ、半死の老僧が蹲まつて居るのである。實之助は失望し始めた自分の心を勵まして、

「そのもとが了海と云はるゝか。」

と息込んで訊いた。

「如何にも左様でござります。してそこ許は。」

と、老僧は訝しげに實之助を見上げた。

「了海とやら、如何に僧形に身を窶すとも、よも忘れは致すまい。汝市九郎と呼ばれし若年の砌、主人中川三郎兵衛を討つて立退いた覺があらう。某は三郎兵衛の一子實之助と申すものぢや。もはや逃れぬ所と覺悟せよ。」

と、實之助の言葉は飽くまで落着いて居たが、其處に一步も許すまじき嚴正さがあつた。

市九郎は實之助の言葉を聽いて少しも駭かなかつた。

「いかさま、中川様の御息の實之助様か、いや、お父上を討つて立退いた者、此の了海に相違ござりませぬ。」

と、彼は自分を敵と狙ふ者に逢つたといふよりも、舊主の遺兒に逢つた親しさを以て答へたが、實之助は市九郎の聲音に欺かれてはならぬと思つた。

「主を討つて立退いた非道の汝を討つ爲に、十年に近い年月を艱難の裡に過ごした。茲で會ふからは、もはや逃れぬ所と尋常に勝負せよ。」と言つた。

市九郎は少しも怯^{おそ}びれなかつた。もはや期年の裡に成就すべき大願の成るを見果てずして死ぬことが、稍悲しまれたが、それもおのれが悪業の報であると思ふと、彼は死すべき覺悟を定めたのである。

「實之助様いざお斬りなされい。お聞及びもなされたらうが、これは了海奴が罪滅しに掘り穿たうと存じた洞門でござるが、十九年の歳月を費して、九分までは竣工致した。了海身が果つるとも、もはや年を重ねずして成り申さう。御身の手にかゝり、此の洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、はや思ひ残すこともござりませぬ。」

と言ひながら、彼は見えぬ目をしばたゝいたのである。

實之助は此の半死の老僧に接して居ると、親の敵に對して懷いて居た憎しみが、何時の間にか消え失せて居るのを覺えた。敵は父を殺した罪の懺悔に、身心を粉に碎いて、半生を苦しみ抜いて居る。而も自分が一度名乗りかけると、唯々として命を捨てようとして居るのである。かゝる半死の老僧の命を取ることが果して復讐であらうかと、實之助は考へたのである。が、然し此の敵を討たない限りは、多年の放浪を切上げて江戸へ歸るべきですがはなかつた。まして家名の再興などは、思ひも及ばぬ事であつたのである。實之助は憎悪よりむしろ打算の心から、此の老僧の命を縮めようかと思つた。が、烈しい燃ゆるが如き憎悪を感せずして、打算から人間を殺すことは、實之助に取つて忍びがたい事であつた。彼は消えかゝらうとする憎悪の心を勵ましなから、討ちがひなき敵を討たうとしたのである。

その時であつた。洞窟の中から走り出て來た五六人の石工は、市九郎の危急を見ると、驚いて彼を庇ひながら、

「了海様を何とするのぢや。」

と實之助を咎めた。彼等の面には、仕儀に依つては許すまじき色がありくと見えた。

「仔細あつて、その老僧を敵と狙ひ、端なくも今は廻り逢うて本懐を達するものぢや。妨げ致すと、餘人なりとも容赦は致さぬぞ。」

と實之助は凜然と言つた。が、その内に石工の數は殖え、行路の人々が幾人ともなく立止つて、彼等は實之助を取巻きながら、市九郎の身體に一指をも觸れさせまいと銘々に敦圀き始めた。

「敵を討つ討たぬなどは、それはまだ世に在る内の事ぢや。見らるゝ通り、海どののは、染衣薙髮の身である上に、此の山國の谿七郷の者に取つては、持地菩薩の再來とも仰がれる方ぢや。」

と、その中のある者は、實之助の敵討を叶はぬ非望であるかのやうに言ひ張つた。

かう周圍の者から妨げられると、實之助は敵に對する怒は何時の間にか蘇つて居た。彼は武士の意地として、手を拱いて立去るべきではなかつた。

「たとひ沙門の身であらうとも、主殺しの大罪は免れぬぞ。親の敵を討つ者

を妨げ致す者は、一人も容赦はない。」

と、實之助は一刀の鞘を拂つた。實之助を圍ふ群集も、皆悉く身構へた。すると、その時に市九郎はしわがれた聲を張上げた。

「皆の衆お控へなさい。了海討たるべき覺え十分御座る。此の洞門を穿つことも、たゞその罪滅しの爲ぢや。今かゝる孝子のお手にかゝり、半死の身を終る事、了海が一期の願ぢや。皆の衆妨げ無用ぢや。」

かう言ひながら、市九郎は身を挺して、實之助の傍にゐざり寄らうとした。

かねて、市九郎の強い意志を知りぬいて居る周圍の人々は、彼の決心を翻すべき由もないのを知つた。市九郎の命は、茲に了るかと思はれた。その時に石工がしらが實之助の前に進み出でながら、

「御武家様もお聞き及びでもござらうが、此の刎貫は了海様一生の大誓願で、二十年に近い御辛苦に身心を碎かれたのぢや。いかに御自身の惡業とは云へ、大願成就を目前に置きながらお果てなさるゝこと、如何ばかり無念であらう。我等の擧つてのお願いは、永くとは申さぬ、此の刎貫の通じ申す間、了海様のお命を我等に預けては下さらぬか。刎貫さへ通じた節は、即座に了海様を存

分になさりませ。」

と彼は誠を表して哀願した。群集は口々に、

「ことわりぢや〜。」

と賛成した。

實之助もさう言はれて見ると、その哀願を聴かぬ譯には行かなかつた。今此處で仇を討たうとして、群集の妨害を受けて不覺を取るよりも、刳貫の竣功を待つたならば、今でさへ自ら進んで討たれようといふ市九郎が、義理に感じて首を授けるのは必定であると思つた。又さうした打算から離れても、仇とはいひながら此の老僧の大誓願を遂げさせてやるのも、決して不快なことではなかつた。實之助は市九郎と群集とを等分に見ながら、

「了海の僧形にめでて、その願を許して取らさう。つがへた言葉を忘れまいぞ。」

と叫んだ。

「念もないことで御座る。一分の穴でも、一寸の穴でも、此の刳貫が向う側へ通じた節は、その場を去らず了海様を討たせ申さう。それまではゆる〜と、

此の邊に御滞在なされませ。」

と、石工がしらは穩かな口調で言つた。

市九郎は此の紛擾が無事に解決が付くと、それに依つて徒費した時間が如何にも惜しまれるやうに、にじりながら洞窟の中へ這入つて行つた。

實之助は大切の場合に思はぬ邪魔が入つて、目的が達し得なかつたことを憤つた。彼は如何ともし難い鬱憤を抑へながら、石工の一人に案内せられて、木小屋の裡へ入つた。

自分一人になつて考へると、仇を目前に置きながら、討得なかつた自分の腑がひなさを、無念と思はずには居られなかつた。彼の心は何時の間にか焦立たしい憤で一杯になつて居た。彼はもう刳貫の竣成を待つといふやうな敵に對する緩かな心を全く失つてしまつた。彼は今宵にも洞窟の中へ忍び入つて、市九郎を討つて立退かうといふ決心の臍を固めた。が、實之助が市九郎の張番をして居るやうに、石工達は、實之助をそれとなく見張つて居た。

最初の二三日を心にもなく無爲に過ごしたが、丁度五日目の晩であつた。毎夜の事なので、石工達も警戒の眼を緩めたと見え、丑^{カウ}に近い頃には、何人も深い

眠に入つて居た。實之助は今宵こそと思ひ立つた。彼はがばと起上ると枕元の一刃を引寄せて、靜かに木小屋の外に出た。それは早春の夜の月が冴えた晩であつた。山國川の水は月光の下に蒼く渦巻きながら流れて居た。が、かうした周圍の風物には目もくれず、實之助は足を忍ばせて、竊に洞門に近づいた。削り取つた石塊が、所々に散らばつて、歩を運ぶ度毎に足を痛めた。洞窟の中は入口から来る月光と、所々に剝りあけられた窓から射し入る月光とで、所々ほの白く光つて居るばかりであつた。彼は右方の岩壁を手探り手探り奥へへと進んだ。

入口から二町許りも進んだ頃、ふと彼は洞窟の底から、くわつ／＼と音を置いて響いて来る音を耳にした。彼は最初それが何であるか判らなかつたが、一步進むに従つて、その音は擴大して行つて、おしまひには洞窟の中の夜の寂靜の裡にこだまする迄になつた。それは明らかに岩壁に向つて鐵鎚を下す音に相違なかつた。實之助はその悲壯な凄みを帯びた音に依つて、自分の胸が烈しく打たれるのを感じた。奥に近づくに従つて、玉を打碎くやうな鋭い音は、洞窟の周圍にこだまして、實之助の聽覺を猛然と襲つて来るのであつた。

彼は此の音をたよりに這ひながら近づいて行つた。此の鐵鎚の音の主こそ敵了海に相違あるまいと思つた。私にハモカ一刀の鯉口を寛げながら、息を潛めて寄添うた。その時ふと彼は鐵鎚の音の間々に、囁くが如く、うめくが如く、了海が經文を誦する聲を聞いたのである。

そのしわがれた悲壯な聲が、水を浴びせるやうに實之助の心に徹して來た。深夜人去り、草木眠つて居る中に、たゞ暗中に端坐して鐵鎚を振つて居る了海の姿が墨の如き闇にあつて、尙實之助の心眼に歷々として映つて來た。それはもはや人間の心ではなかつた。喜怒哀樂の情の上にあつて、たゞ鐵鎚を振つて居る勇猛精進の菩薩心であつた。實之助は握りしめた太刀の柄が、何時の間にか緩んで居るのを覺えた。彼はふと自分自身を顧みた。既に佛心を得て、衆生の爲に碎身の苦を嘗めて居る高德の聖に對し、深夜の闇に乗じて、おひはぎの如く、獸の如く、瞋恚の劍を抜きそばめて近寄らうとする自分を顧みると、彼は強い戰慄が身體を傳うて流れるのを感じた。

洞窟を搖がせる力強い鐵鎚の音と、悲壯な念佛の聲とは、實之助の心を散々に打碎いてしまつた。彼は潔く竣功の日を待ち、彼との約束の果さるゝのを待

つより外はないと思つた。

實之助は深い感激を懐きながら、洞外の月光を目指して、洞窟の外に這出たのである。

その事があつてから、實之助は洞窟の外の木小屋の内に朝夕を送りながら、心靜かに剣貫の成就されるのを待つて居た。彼はもう老僧を討つて立退かうといふやうな峻しい心は、少しも持つて居なかつた。了海が逃げも隠れもせぬ事を知ると、彼は好意を以て了海がその一生の大願を成就する日を待つてやらうと思つて居た。

彼一人が爲すこともなく暮して居るにも拘らず、周囲の石工達は寸陰をも惜しんで懸命に働いて居た。了海の不斷の精神が、何時の間にか石工達の心にも浸渡つて居るやうであつた。

彼等は實之助に對して、朝夕快い挨拶を送つた。

「お武家様、今日は何處へおはせられた。」

などと問ひかけられる度に、實之助は自分の所在のない生活が氣になつて居た。周囲の人々が凡て狂氣のやうに働いて居る中に、自分一人漠然と暮して

居る事が、彼に心苦しく思はれ始めた。二月もかうして漠然と暮して居る内に、彼はふと思ひ付いた。かうして爲す事もなく待つて居るよりも、自分も此の大業に一臂の力を盡くすことに依つて、幾何でも成就の日が早められるのではないかと思つた。それと同時に復讐の期日が縮められるのではないかと思つた。さう思ふと、彼はその日から、石工の群に伍して、鎚を振ひ始めたのである。

かうして、敵と敵とが相並んで鎚を下し始めたのである。實之助は本懐を達する日が一日も早かれと懸命に鎚を振ふのであつた。了海は實之助が出現してからは、一日も早く大願を成就して、惜しからぬ命を孝子の手に授けてやりたいと思つたのであらう、彼は今までにも見られなかつたやうな烈しさで、狂人のやうに岩壁を打碎いて行くのであつた。

その内に、月が去り月が來た。最初は自分自身の爲に鎚を振つて居た實之助も、此の剣貫の大業を爲しがひのある仕事であるときへ思ふやうになつて居た。阿修羅の如く鎚を振つて居る了海の姿を見て居ると、彼はその勇猛心に動かされて、兎もすれば讐敵の恨を忘れがちであつた。

延享三年
吉宗の頃。

石工どもが晝の疲を休めて居る眞夜中にも、此の敵同志は黙々として鎚を振ふことなどもあつた。それは了海が樋田の岩壁に第一の鎚を下してから丁度二十一年目、實之助が了海に廻り逢うてから一年六ヶ月を経た延享三年九月十日の夜であつた。此の夜も石工どもは悉く小屋に退いて、了海と實之助のみが終日の疲勞にめげず、懸命に鎚を振つて居た。その夜九つに近い頃であつた。了海が力を籠めて振下した鎚が、朽木を打つが如く何の手答もなかつたので、思はず力餘つて、鎚を持つた右の掌が岩に當つた。その時であつた。彼は「あつ」と思はず聲を揚げた。了海の朦朧たる老眼にも、紛れなくその鎚に破られた小さい穴から、月の光に照らされた山國川の姿が歴々と映つたのである。了海は「おう」と全身を顫はせるやうな、名狀しがたき叫聲を擧げたかと思ふと、それについで狂したかと思はれるやうな歡喜の泣笑が、洞窟を物凄く揺らめかしたのである。

「實之助どの、御覽なされい。二十一年の大誓願、今宵端なくも成就いたしました。」かう言ひながら了海は實之助の手を取つて、小さい穴から山國川の流を見せた。その穴の眞下に黒すんだ土の見えるのは、岸に添ふ街道に紛れもなかつた。敵と敵とは、そこに手を取り合うて、大歡喜の涙に咽んだのである。が、暫くすると了海は身を退つて、

「いざ、實之助殿、約束の日ぢや。お斬りなされい。かゝる法悅の最中に往生致すれば未來は淨土に生るゝこと、必定疑なしぢや。いざお斬りなされい。明日ともなれば、石工どもが妨を致さう。いざお斬りなされい。」と、彼のしわがれた聲が洞窟の夜の空氣に響いた。が、實之助は了海の前に手を拱いて坐つたまゝ、涙に咽んで居るばかりであつた。心の底から湧き出づる歡喜に響く凋びた老僧の顔を見て居ると、彼を敵として殺す事などは思ひ及ばぬ事であつた。敵を討つなどといふ心よりも、此の羸弱い人間の二つの腕に依つて成し遂げられた偉業に對する驚異と感激の心とで、胸が一杯であつた。彼はゐざり寄りながら、再び老僧の手を取つた。二人は其處に凡てを忘れて、感激の涙に何時までも浸つて居たのであつた。

日十三月一年三和昭
文 部 省 檢 定 濟
 用科語國校學女等高

最新女子國文 卷七 終

昭和二年九月二十三日印刷
 昭和二年九月二十八日發行
 昭和三年一月二十日訂正再版印刷
 昭和三年一月二十三日訂正再版發行



不許複製

最新女子國文	
卷別定價金 <small>昭和六年臨時定價</small>	卷別定價金 <small>昭和六年臨時定價</small>
一 四拾參錢 六拾八錢	六 四拾貳錢 六拾六錢
二 四拾貳錢 六拾六錢	七 四拾壹錢 六拾五錢
三 四拾參錢 六拾八錢	八 四拾參錢 六拾八錢
四 四拾參錢 六拾八錢	九 四拾參錢 六拾八錢
五 四拾壹錢 六拾五錢	十 四拾參錢 六拾八錢

著者 松村武雄

發行者 大葉久吉

東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地
 大阪市西區阿波堀通四丁目二十番地

發行所 柏佐一郎

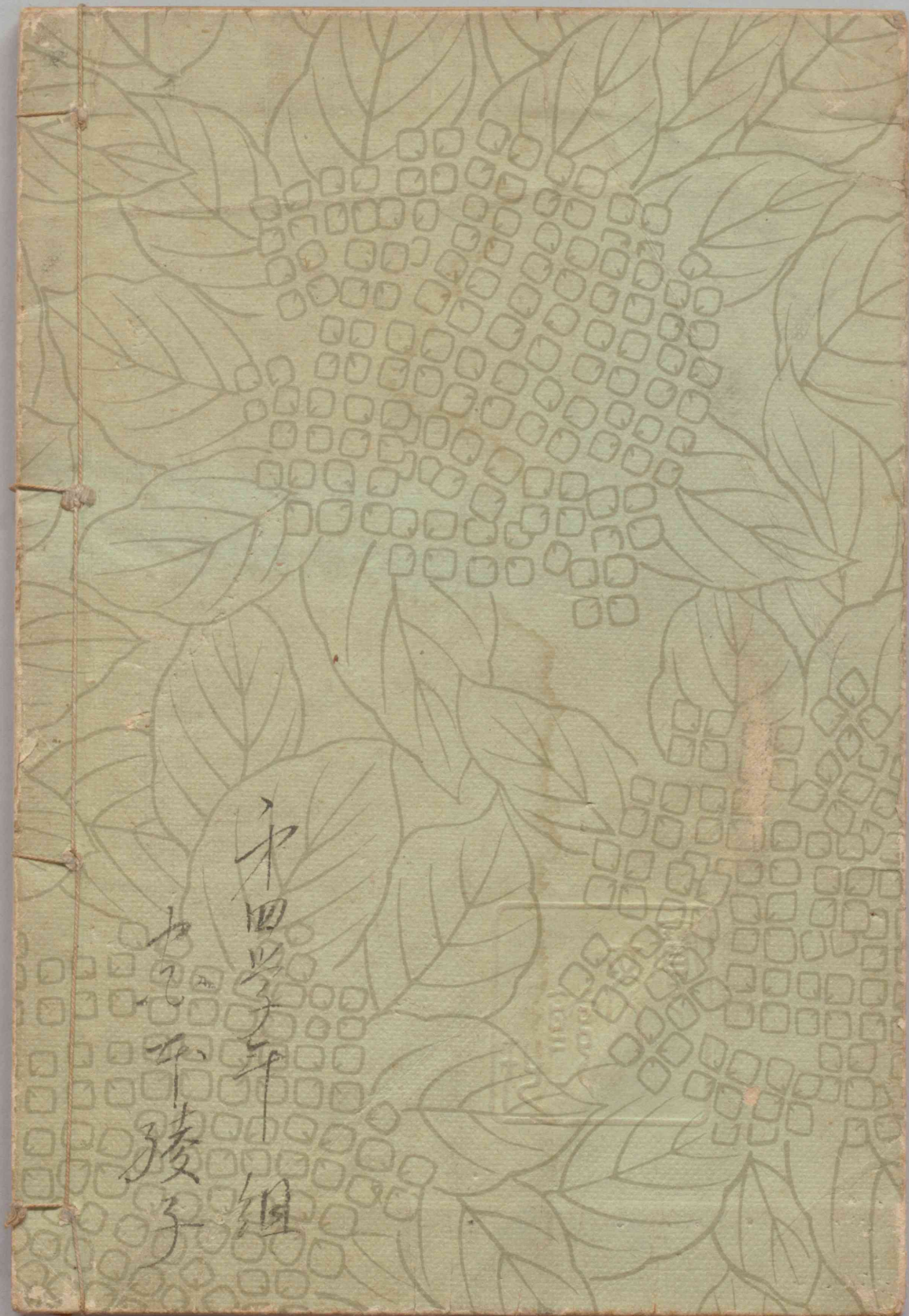
發行所

東京市日本橋區本銀町 (振替東京二八〇)
 大阪市西區阿波堀通四 (振替大阪四三)
 神戸市元町通五丁目 (振替大阪九五二)

寶文館

才四學年日記
官本綾子





十四學年
女子組